

徳永陸繁氏、はれの受賞

去る11月2日に発表された秋の叙勲で、日本ハンドボール協会顧問、元副会長の徳永陸繁氏の永年に亘るハンドボール競技の振興に尽くされたご功績に対し勲五等双光旭日章が授与されることとなった。

同氏は昭和21年に日本協会の理事に就任され、56年3月に副会長を辞され、その後も顧問として協会の発展と後輩のご指導につくされ今日に至っておられる。この間、昭和25年から45年まで全国高等学校体育連盟ハンドボール副部長、45年から53年までは部長として今日の高体連ハンドボール発展に大きく貢献された。

今回の栄誉に対し心からお祝いを申し上げると共に、益々のご健勝をお祈り申し上げます。

日本協会便り

10月度　常務理事会

日　時　10月9日（土）10:30～16:50
場　所　岸記念体育館地下会議室
出席者　中澤専務理事ほか9名

1.ナショナルチームの強化、活性化について

専務理事より本件は協会にとって重要な課題であり、来月開催されるオーナー会議との関連もあるので意見の交換を行いたい旨提案あり、強化体制、編成等について活発な意見交換が行われた。今後、更に強化委員会と煮詰め、具体化して行くこととした。

2.日本リーグ加盟チームオーナー会議について

下記要領で開催することに決定
日　時　11月16日（火）14:00～15:30
場　所　経団連会館
出席予定者　日本リーグ加盟チームオーナー
日本協会……斎藤会長、渡邊副会長、中澤専務理事、担当常務理事
実業団連盟…市原理事長
主な議題　(1)ナショナルチーム活動状況
(2)不況下に於けるハンドボール部の維持と、さらなる協力の依頼
(3)世界選手権大会の招致活動の経過報告と協力依頼

3.登録規定について

下記項目以外はおおむね原案通りとし、細部については担当者が詳細検討し、全国理事会に提案することとした。

今回、審議のうえ決定した事項

(1)日本協会にチームとして選手登録がなされていなくても、日本代表選手(ジュニアを含む)として推薦することが出来る。
(2)登録は従来通り3重登録まで出来る。
(3)外人については登録人数の制限はしない（但し、各種大会、リーグはそれぞれの大会規定が優先する）

4.男子アジア選手権大会報告

(1)今大会の成績は第3位であった。
(2)今後のナショナルチームは一部ベテランを復帰させチームリーダーとすることも考えている。
(3)基本的なプレーに雑な面が見受けられるので改善させたい。(2)(3)については強化委員会で検討していく。
(4)バーレンでは在留日本人に大変お世話になり、何等かの形で感謝の意を表したい。一案として現地の日本人学校にハンドボールのゴールポストを寄贈することを検討したい。
(5)来年の世界選手権予選は極東予選1位、中東予選1位、更に極東中東の2位同士の対戦の勝者の合計3チームが代表になることが確認された。予選の開催時期、場所については10月中に決定される予定。

5.第48回国民体育大会ハンドボール競技

組合せ抽選会は10月5日に実施された（詳細既報）

6.高校選抜大会開催地について

先般、高体連より選抜大会開催地を変更したい旨申入れがあったが、その後、愛知県ハンドボール協会より『名古屋開催の返上を申し出ていない。更に、主催者である日本協会からは何の通知も受け取っていない』との文書が出された。

本件に関しては愛知県協会と高体連で協議のうえ、次回の常務理事会で佐分高体連部長より報告戴くこととした。

7.読売スポーツ賞について

推薦依頼があり、候補について検討したが、次回常務理事会で結論を出すこととした。

8.オフィシャルサプライヤーについて

93年度は従来通りの条件でアシックスとすることを決定。

9.全日本総合選手権大会協賛について

前年と同一条件でアシックスを協賛企業とすることに決定。

世界選手権大会招致について

97WCニュース

AHF理事会が心強い後押し

井　薫

第15回世界男子ハンドボール選手権大会の招致について、9月21日東京で、日本協会は斎藤会長をはじめ、副会長、各常務理事が、熊本側からは福島県知事、市長、体協会長、県協会長の各氏が出席。討議の後、招致委員会が正式に発足しました。

そして9月23日、第7回アジア男子ハンドボール選手権大会が開かれる中東湾岸のバーレーンに向かいましたが、出場する日本チームの団長としての役目のほかに、アジアの舞台における世界選手権招致に関しての仕事も兼ねていました。

AHFの理事会は、9月27日ガルフホテルで行われ、席上、渡邊副会長から日本開催の意向の説明があり、金AHF副会長の同意発言も得て、満場一致で承認され、11月のクウェートでのIHFの理事会にAHFの提出議題として取り扱われる事になりました。

私は渡邊副会長のサポーターとして、大会期間中に幾人かの要人と日本開催について話をする機会がありましたので紹介します。

まずAHFの会長で、IOC(国際オリンピック委員会)のメンバーでもあるシエーク・アーマド氏。先の湾岸戦争で亡くなった父ファハド前会長の後を継いで、今後アジアはもとより、世界のスポーツ界をリードする一人と言われる立場の人で、2000年のオリンピックがシドニーに決ったモンテカルロのIOC総会を終えてバーレーンに到着したばかりでしたが、来年の広島でのアジア大会の成功と共に、熊本での世界選手権の誘致を支え、大会の成功を期待するとの心強いコメントをいただきました。



シェーク・アーマドAHF会長と井薫氏

さらに大会の後半に現地入りをしたIHFの事務局長のレイモンド・ハーン氏とは、同時期に到着したアジア大会のハンドボールの総責任者の山下常務理事と共に会食。「大都市ではイベントが多く、個々の大会には無心、地方都市での成功例は多く、地方都市もまたイベントを通して世界に多くの友人を持つ事になる」と意をつよくする言葉をもらいました。

ただスペイン、エジプトも招致の意向であり、11月のクウェートでのIHFの理事会で、日本としての意志表明と、開催地熊本の受入れについての紹介を行うべきであるとの助言もあり、同理事会と11月末から12月初旬にかけてのノルウェーでの女子世界選手権大会が、最も重要な機会だと言う認識を強くしました。

CONTENTS

写真提供：スポーツイベント

12月度　行事予定

会　議

11/20 午前　常務理事会　東興ホテル会議室
〃　午後　全国理事会　〃

大　会

12/15〜19 第45回全日本総合選手権大会　名古屋市

第45回全日本総合選手権展望

男女とも 日本リーグ勢の争い必至!!

第45回大会は12月16日から19日まで、初めて名古屋市で開催される。第1回大会が愛知県一宮市でスタートして以来、2度目の愛知県内の開催になる。

日本リーグ、実業団、教職員、大学生の代表（男子16、女子14チーム）によるトーナメント。第38回大会において、東京女子体育大学が優勝して以来、日本リーグチームによる優勝争いが続いているが、今大会も準決勝以上は、日本リーグ勢の争いと予想する。

男子は三連覇をねらう日新製鋼、湧永製薬、大同特殊鋼、勢い上昇中の中村荷役が勝ち上がってくると予想する（11月1日現在、組合せは決定していないが、過去の組合せ方法にあてはめてみた）。

日新製鋼は、先の日本リーグにおいて守護神・宇田川の果敢なキーピングとディフェンス陣の安定した守りが光っていた。またベテラン木村、堀田の活躍が目立った。木村は得点ランキング入り、堀田は高シュート率をあげるなど、このチームの層が厚いことを感じさせた。これからのポイントとなるのが試合運びである。スロースターターと言うか、取られたら取り返す試合が多く、初めからガンガン行かず、途中で逆転するパターンが多い。

今大会三連覇を目指す日新製鋼は先手必勝で臨み、10月11日急死された岩田部長の霊前に三連覇の報告を期待する。

湧永製薬のベテラン勢玉村、酒巻、河原、堀田が攻守にわたり安定しているのが強みである。この4人で、毎試合20点は確実に得点し、中山、田中、長沢らが加点するパターンだが、中山の調子次第で、ベテラン4人にどの程度の負担がかかるか。4日連続の試合に勝たなければならない全日本総合においては、ベテラン勢にあまり負担をかけないで勝ち上がれれば、3年ぶりの優勝の可能性は大である。

大同特殊鋼は、日本リーグ後期の勢いと盧に対して出遅れていた林(珍錫)の復調がキーとなる。二人に末岡を加えたフローター陣が復活すれば、日新製鋼の三連覇にストップがかけられる。

今年の日本リーグを見て、中村荷役の躍進がある。ベテラン勢と若い選手がうまく噛み合っている。昨年の日本リーグ後半の勢いを持続し、今年の日本リーグを好スタートできた。試合運びでは、勝負どころに雑なプレーが見られ甘さを感じさせたが、守護神・井上の成長、ロングの呉と朴とのコンビプレーがチームの勢いを引き出している。日本リーグ中、毎試合速攻のシュートミスを必ず二つずつ得点にできれば、タイトルへの射程圏に入れるし、全日本総合の決勝進出も不可能ではない。チーム力が上昇する課程において試合運びを覚えれば、常に上位定着も可能。今の中村荷役には、その力と上昇する勢いがあり、今大会では台風の目である。

女子はオムロン、北國銀行、日立栃木、大崎電気が準決勝に駒を進めるだろう。昨年の覇者オムロンは、張を中心とした堅いディフェンスと速攻で連覇をねらうが、そのキーを握っているのがチーム一小柄な古田である。相手ミスを速攻につなげる時の出るタイミングとスピードが実によく、古田が出れればオムロンの二連覇は可能性大である。

北國銀行は、白、金コンビが攻撃の中心で、二人につながるゴールは総得点の半分以上で、その得点力は日本リーグの中でピカ一である。守りよりも攻撃中心のチームなので、波に乗れないと途中苦戦も予想される。日本リーグ上位で優勝をねらえると思うが、去年のように波に乗れないまま60分が過ぎてしまう心配もある。

日立栃木は、順当にいけば準決勝でオムロンと対戦するかと考えられる。市来、新井の両ベテランに頼る所が大きく、準決勝進出までオムロンを苦しめることは難しい。

今大会、大崎電気は常連であった日本リーグ推せんではなく、実業団推せんで出場する。二回戦でブラザー工業との対戦が考えられ、勝ち上がれば北國銀行との対戦となるだろう。日本リーグでは二部へ陥落したが、即戦力の補強もスムースに進み、二部では格上。かつての金、尹に代る朴、白(仁淑)の新コンビが、北國銀行戦で韓国コンビに対してどの程度元ナショナル代表の意地を見せるか興味どころである。

第45回全日本総合選手権推薦チーム

推薦	男子	女子
日本リーグ	湧永製薬 日新製鋼 本田技研 大同特殊鋼 大崎電気 中村荷役	オムロン 北國銀行 シャトレーゼ ジャスコ 日立栃木 ブラザー工業
実業団	三陽商会 トヨタ車体	大崎電気 大和銀行
教職員	香川教員 京都教員クラブ	京都教員クラブ
日本協会	パームヒルズクラブ 大同クラブ 日本電装	香川銀行クラブ DAIWAクラブ
学生	インカレ1位 インカレ2位 インカレ3位	インカレ1位 インカレ2位 インカレ3位

アジア大会の成功に向けて　さらなる前進を!!

団長　井　薫

第7回アジア男子ハンドボール選手権大会は9月24日から、ペルシャ湾に浮かぶ人口55万の島、バーレーンで行われました。

石油を産出するリッチな湾岸諸国では、ハンドボールはサッカーにつぐ人気スポーツ。旧東欧から実績のある指導者を招いての強化は、従来はパワーはあっても精神面がモロく、4～5点リードを許すと、もう粘れない傾向のチームが多く見られたのに、やはりモチベーションや集中力が鍛えられて来たのか、実力は急上昇。新聞やテレビの報道も大きく、会場はいつも満員の盛況でした。

空港に出迎えの人に「少し涼しくなりました」と言われても38度、7月末は45度前後とかで、まさに炎天下。そして逆に車やホテル、体育館等は、肌寒さを感じる程の冷房で、プレイヤーはこの温度差にコンディション調整がかなり難しかった様です。

さて中山、魚住の両長身アタッカーが怪我で不参加の今回の日本チームは、若くて小柄な印象。初戦、クウェートのパワープレイに競り負け、さらに中国戦も基本的とも言えるパスやキャッチにミスが出ての敗戦。上位進出の道を絶たれたと思われましたが、これも中国によく見られるパターンで、中国はカタール戦に信んじられない大敗を喫し三者同率。結局、得失点差で日本が決勝に進むのですが、どんな型にしろ若いメンバーの日本には、嬉しい事でしたし、運も力のひとつと考えて良いのでしょうか。

さて現在のチームを団長の立場で分析しますと、まずキャプテン橋本を軸とするGK陣は、文句なしのアジアNo.1。今回もその堅守に幾度チームは救われた事か。次にアタッカー不在の中で、積極的なプレイでゲームを重ねるごとに自信をつけ頭角を表した三輪。立派な活躍で、今後に明るさを感じさせるものでした。

その他のプレイヤーは、数回の欧州遠征で各々に力を付けては来ているものの、正確さとスピード感に欠けるのでは、国内はともかく国際ゲームでは勝負にならない。

基本的ミスが多いのは、反復練習の量や、練習項目に問題があるのではないかと、、タッフに課題として残したい。

またスピードとは、単に走力を言うのではなく、位置どりや、判断力、瞬発力を総して言いますが、ひとつには最近の戦法として固定化した観のある攻防時のスイッチが、プレイヤーのリズム感に影響はないのか。これも課題としたい。

湾岸諸国が強くなり、パワープラス確率が求められ、変わりゆくアジアのハンドボールを今回つぶさに体験出来た事は、アタッカーの復帰とリーダーシップを発揮出来るプレイヤーの育成が成れば、来年のアジア大会では充分「金メダル」を狙えるチームだと思いました。

今回、日本協会の米倉副会長のご厚意もあり、現地の伊藤忠商事の方をはじめ、日本人会の皆様に歓迎会や会議の通訳、ご婦人方の連日の「おにぎり」の差し入れ、そして日の丸を打ち振っての大応援団と、本当に物心両面からお世話をいただき、心からお礼を申しあげたいと思います。

そしてプレイヤー達も、休日には先生10名、生徒数40名の日本人学校を訪問。子供さん達とハンドボールやクイズゲームで交流。厳しい大会の中にも、とても心に残る嬉しい交流が出来ました。そして日本人会の皆様にもお約束しました様に、アジア大会での金メダルの朗報を是非お届けしたいものと思います。

会場は熱気そのもの。ラフプレイやそれに伴うイエローやレッドカードが宣せられますと、興奮した観客がなだれ込みそうになります。それを防ぐためにコートを鉄さくで囲み、警官がコートを背にスタンドの動きを監視するといった雰囲気の大会でしたが、好プレイや、GKのナイスキーピングには、床を鳴らし口笛で審判の判定が聞こえない程の歓声。久しぶりに充実した大会に参加する事が出来ました。

幾つかの課題を得ましたが、現場の頑張りに期待し、皆様のご支援をお願いして、アジア大会の成功にむけ、前進したいと思います。



Picture by Jaffer Ali
Action from the Kuwait-Japan match. More pictures on Page 22

Kuwait beat Japan in Asian handball shock

By V T GEORGE

KUWAIT sprung the first major upset of the Seventh Asian Handball Championship yester

クウェートの活躍を伝える現地の新聞

新たなる強化目標が明確に

監督　蒲生　晴明

1、はじめに

1991年広島でのバルセロナオリンピック・アジア予選（第6回アジア選手権大会）で韓国に決勝戦で敗れ、オリンピック6回連続出場がとぎれ悔し涙にくれてから、2年が経過した。今回は、前回の雪辱と現在の全日本の力量、そしてアジアの各国の強化の進捗状況をはかるなど、色々な意味でのトライアルであった。

出発に際して、日本協会役員の皆様、各チームの役員の方々、報道関係の皆様方の絶大なる激励をいただきまして、誠にありがとうございました。大会の報告を以下にさせていただきまして、御礼に代えさせていただきます。

2、大会の報告について

平成5年度は、日本国内の過密スケジュールの中、限られた期間のトレーニングを実施してきた。選手達は、各チームと全日本チームでの活動で休む暇もなく、トレーニングに打ち込んでいた。今大会のメンバーエントリーについても、過密スケジュールの影響も関係があると思われるが、主力選手に負傷者が相次ぎ、メンバーエントリーが大会直前まで決まらない状況であった。しかしながら、負傷者の交替として、新しくエントリーした選手を快く派遣していただいた各チームの関係役員の皆様、変更についてご理解をいただいた日本協会の役員の皆様に御礼申し上げます。

さて、開催国バーレーンは、中東のホンコンと呼ばれるぐらい金融関係・商社などが集中している国であり、ハンドボールもサッカーに次ぐ国技になっているほど熱狂的で、スポーツ好きな国であった。我々は、9月21日に現地に到着。空港を出て気が付くことは、とにかく暑いことであった。湿度も非常に高く、蒸し暑いと言った表現が正しいと思うぐらいであった。しかし、一旦ホテルなど室内にはいれば、大変に涼しく、その意味では、外気温との差に対してどのようにコンディションを合わせていくかが、重要なポイントでもあった。幸い、三原ドクター、藤井トレーナーの帯同をいただいたことにより、選手達のコンディション造りは心配なく問題はなかった。トレーニングについては、午前中に1時間しかなく、十分とは言えなかった。

9月24日、オープニングセレモニーに続き、開催国バーレーン対カタールのゲームが実施された。体育館の中は、超満員。驚いたのは、コートの周囲に4mぐらいの鉄製の柵が張り巡らされていたことである。一般の観衆がエキサイトしてコートの中に乱入するのを防ぐためのものであった。さらに、警察官が観衆の警護に迅速に当たり、さしずめ人気スターのコンサート会場のようであった。このような観衆の中でゲームは進んでいったが、バーレーンが21−18で勝ち、オープニングゲームを勝利で飾った。

9月25日、日本はクウェートと対戦した。以下に、ゲームの戦評を述べる。

①予選・クウェート戦

前半スタートから1点差の攻防が展開されたが、日本は、前半12分からディフェンスが良くなり、守ってからのファーストブレイクが立て続けに出て4−4から5点連続得点し、9−4とリードをした。しかしながら、クウェートもその後、日本のミスに助けられ、リズムを取り戻し5連続得点で9−9の同点にしたが、日本は、終了間際1点をもぎ取りリードして前半終了。後半になり日本はすぐ得点したが、その後リズムを崩し、クウェートに5連続得点され逆転された。その後、日本はジワジワ追い上げ、残り9分に同点に追い付いたが、追い越す所でのミスが出て、2点差で敗戦。この大会に臨むに当り、初戦のクウェート戦に照準を絞っていたが戦力が整わず、残念な結果となった。クウェートは、旧ソ連の監督を招へいし、より強敵になった。

②予選・イラン戦

イランもロシアからコーチを招き、前回より十分に強化がされていた。このゲームは負けられない大切なゲームであり、従来の感覚では、問題はなかった相手であったが苦戦した。前半から日本はイランにリードを許し、一時は3点差まで広がったが、前半12分からリズムをつかみ同点とし、終了間際のシュートで1点差で前半終了した。後半に入ってもイランの動きは止まらず、一進一退のゲームになった。10分過ぎから、日本のディフェンスからの速攻が出て4点差まで開いたが、その後は行ったり来たりの展開のまま2点差の辛勝。今後も侮れない相手である。予選リーグ2位でメインラウンドへ進出。

③メインラウンド・中国戦

予選ラウンド2位でメインラウンドに進んだが、初戦中国と対戦。中国は、従来のメンバーにベテラ

個人得点	クウェート KUW	イラン IRN	中国 CHN	韓国 KOR	カタール QAT	クウェート KUW	サウジアラビア SAU	合計
橋本　行弘								
林　康一								
坪根　敏久								
田中　雅彦		1	3	5	5		3	17
宮本　栄治	1			4	4	3	5	17
高木　浩司				1				1
梅基　幸一								0
末岡　政広	3	5	1	1	4	3		17
田中　茂	3	4	4	1	3	4	6	25
佐藤壮一郎		1		1	1	1		4
高田　浩								0
渡辺　浩	5	4	2	1	3	2	2	19
三輪　澄高		8	3	4	5	5	4	29
林　昌英	2		1			1	1	5
源内　利之	5	4	1		1			11
岩本　真典	2		4	1				7
	21	27	19	19	26	19	21	152

ン勢をカムバックさせた陣容であった。日本は前半、一時4点差までリードされたが、25分から3連続得点で1点差まで追い上げた。後半になっても1点の攻防が続いたが、両チームとも遅攻に切り替えたため緊迫したゲーム展開になり、1点勝負となった。日本は、ゴールキーパーの好守があって同点にするチャンスが何度もあったが、ミスにより自滅の形になった。

④メインラウンド・韓国戦

前回の優勝チームである韓国との対戦は、両チームともリズムに乗れないまま15分4－5。ここから韓国は4連続でリズムをつかみ、日本もこれに応戦したが、7－12のまま折り返した。後半は、一時7点差まで広がったが、日本はディフェンスが持ち直し、5連続得点で2点差まで追い詰めた。その後一進一退の攻防であったが、19－22で敗れた。

韓国のロング・ミドルシュートをある程度は止めたが、要所での攻撃のミスが最後まで響いた一戦であった。

⑤メインラウンド・カタール戦

日本は、メインラウンドで2敗をしたが、同組の中国がカタールに敗れたため、このカタール戦で3点差以上で勝つことにより（韓国が中国を敗ることが前提）、メインラウンド第2位になり、準決勝に進むことができる大切な一戦であった。スタートは、日本が2点を連取し先行したが、その後カタールもセットプレーから粘り強く加点し、なかなか引き離せない展開になった。しかし、中盤からゴールキーパーのファインプレーが出て、ジワジワ引き離し、前半は4点リードで終了。後半に入り、4点差をキープしながら我慢の展開が繰り返されたが、その甲斐があってディフェンスのリズムがでて、守ってからの速攻が連続して成功。ゲームの主導権を握り、カタールを後半10分過ぎからわずか1点に押さえて快勝した。

このゲームの後、韓国－中国戦があり、韓国が中国を敗ったため、日本はメインラウンドで中国－カタールと勝点でならび得失点差でメインラウンド第2位で準決勝に進んだ。

⑥準決勝・クウェート戦

予選リーグで初戦対戦し、敗れたクウェートと再び対戦ができるということで、選手達もかなりエキサイトしていた。ゲームは、その気迫とは裏腹にクウェートが遅攻に持ち込み、スタートから4点連取。9分ようやく日本は1点を取ったが、その後4点のアヘッドはなかなか埋らなかった。前半終了間際に6点差になったが、その後4失点をされ、8点差まで一気に開いてしまった。主導権を握られてしまった日本は、必死にディフェンスを固め反撃したが、リズムが取れないまま時間が過ぎてしまった。

このゲームで、劣勢のときリーダーシップを取るものがいなかったことが、大きな課題として浮き彫りにされた。チームゲームである以上、今後リーダーシップが取れるものを育成していかねばならない。

⑦3位決定戦・サウジアラビア戦

前回の大会では、2位の日本としては、何としてでも3位になる覚悟でスタッフ・選手共々必勝の構えで臨んだ。先取点を取ったのは日本であった。その後両チームともリズムを摑むことができず前半は日本が3点リードして終了した。後半開始早々、日本はセットプレーから2点連取し、5点差として、主導権を握った。ディフェンスも安定し、ゴールキーパーの超ファインプレーが続出し、快勝した一戦であった。

⑧総評

今大会の結果は、韓国・クウェートに次いで、第3位の銅メダルになった。日本全国のハンドボール関係者の皆様、ハンドボールファンの皆様のご期待にそえなかった事は、大変に申し訳なく思っております。しかし、今回の大会で現在のアジア各国の力量や状況が把握でき、94年広島アジア大会に向けて、新たなる強化目標が明確になったことも事実である。また、主力の負傷による欠場や大会期間中のアクシデントなどが重なり、大変に苦労した大会であったが、選手達がよく戦ってくれたからこそ出来た銅メダルであることも付け加えて置きたい。今後、アジア大会、アトランタオリンピック予選に対して強化計画を見直し、万全の体制で臨むつもりでいる。

3、おわりに

今大会に対して、三原ドクター、藤井トレーナーと両氏を派遣していただいた所属の関係の方々、選手を派遣していただいた各チームの関係の方々はじめ、国内合宿でお世話になった大同特殊鋼、大崎電気の皆様、そして日本協会の皆様に感謝申し上げ報告とさせていただきます。

本当の勝負は今始まったばかり

主将　橋本　行弘

今大会を振り返ってみると、いろいろな事があった。まずは主な戦績と、その概要を簡単に説明しておきたい。

予選リーグD組の日本は、初戦クウェートと対戦し、21—23で惜敗。つづくイランには27—25で何とか逃げ切り、1勝1敗で予選リーグ2位となり、予選二次リーグへの進出を決めた。

二次リーグでは中国・韓国・カタールの3チームでのリーグ戦となり、日本は中国・韓国ともに19—22の3点差で惜敗し、もはや準決勝進出絶望の崖っぷちまで立たされたが、中国がカタールに負けた事で、全勝の韓国を除いては日本が二次リーグ最終戦のカタールに3点差以上つけて勝つ事で準決勝進出を自分でつかむチャンスに恵まれ、日本はカタールを26—14で快勝。準決勝進出を決めた。



準決勝では初戦で戦ったクウェートと再び対戦。雪辱を晴らそうとゲームに挑んだが、攻守ともに空回りし、再び敗れて3位決定戦のサウジアラビアとの対戦に回る事になった。そして最後の3位決定戦を21—14で快勝した事で、今大会4敗はしたものの3位の座を確保する事が出来た。

昨年の第1回極東選手権大会での優勝、8月のヨーロッパ遠征での充実からも、関係各位の皆様やファンの方々まで、久々の日本の王座奪回を心待ちにしている事は選手として一番感じているところでしたが、大会前の中山・河野・平松の故障、また出発直前の魚住の腰痛によるリタイア、大会途中での梅基・源内の怪我など、いろいろなアクシデントに見舞われ、チーム構成も即席メンバーとなり、ヨーロッパ遠征迄はワンポイントだけの選手を大会の中で勉強しながら使うという形になってしまった事は事実。チームの方向性として〝今ある物だけで勝負する〟という監督の言葉を選手全員で受けとめ〝しつこく、泥臭く、ネバっこく〟をモットーに一生懸命頑張りました。

第7回アジアハンドボール選手権大会、日本は12チーム中3位という成績で、前回チームの優勝を狙える2位と、8位に転落してしまうかもしれない3位との差があったのでは、という人がいるかもしれないが、そう思われてもしかたがない。確かに結果的に3位で、危険性としては8位なのかもしれないが、現時点の〝強化の過程〟は2年後に優勝を狙えるものだと私は信じている。

高いリスクを背負って挑んだこの大会でも、一応の成果を出す事が出来たが、私たちの本当の勝負は今始まったばかりだと思っている。

ドクターとして帯同して

岩下病院　整形外科　三原久範

　今回、バーレーンで開催された第７回アジア選手権に、男子ナショナルチームのドクターとして初めて帯同する幸運に恵まれ、大変緊張して出発の飛行機に乗り込みました。

　機内ではハンドボールのルールブックを片手に携え、河野先生から頂いた選手の詳細な外傷・障害歴に目を通しておりましたが、飛行機が揺れる度にせっかく詰め込んだデータが頭から飛び出してしまう有り様で、うまく任務が果たせるか心配でした。おまけに、今回の遠征地はバーレーンという聞き慣れない中東の国であり、気候も生活習慣も異なった地で選手の体調維持が出来るかどうか、不安は募るばかりでした。しかし、いざバーレーンに着いてみると、首都マナマ市は近代化された街で、滞在したホテルもアメリカンナイズされて、食事や空調設備なども充分満足できるものでした。更に、スタッフの気さくな雰囲気と、選手達の礼儀正しく明るい態度のおかげで、早々にチームに馴染むことが出来ました。

　到着した翌日、現地のアメリカ人医師ロナルド氏が国営のスポーツ・メディシン・センターを案内してくれました。治療機器やトレーニング設備は日本と殆ど同じレベルで、治療やトレーニングに対する考え方も日本のそれと大きな違いはありませんでした。しかし、利用者の数は非常に少なく、職員や患者ののんびりした雰囲気が印象的でした。それでもロナルド氏によれば〝忙しい〟と言うのですから、日本の病院などとても見せられないなと内心苦笑しておりました。

　さて、毎日の練習と試合を見て最初に感じたことは、ハンドボールは選手同士が接触する機会が非常に多く〝格闘技だな〟という印象でした。そのため、どうしても選手の体格の違いに目がいってしまいます。他国、特にアラブ諸国の選手達を日本選手と比べて見ると、身長はそれほど差がないのですが、横幅が大きく、太々しい髭を携えた顔と相俟って一層大きく強そうに見えました。このような選手と対峙しなければならないのですから、日本選手達の受けるプレッシャーは肉体的にも精神的にもかなり大きいようでした。試合中、攻撃に行き詰まって苦しい展開になると、日本選手の手足の動きは素人の目で見ても遠慮がちで自信なさそうに映りました。

　よく「健全な精神は、健全な身体に宿る」と言われますが、スポーツの場では「強い精神力は、強靭な筋肉と太々しい顔に宿る」のではないかと感じました。相手のプレッシャーに打ち勝つために、もっと筋肉をつけ、そこからオーラを発するくらいの強い精神力を身につけてもらいたいと思います。顔に関して言えば、今回御一緒したスタッフと選手達は、例外もあるものの、ハンサムで甘いマスクを持った人が多く、応援に来てくださった現地日本人会の御婦人方の殆どがファンになってしまう程でした（おかげで私など見向きもされず、寂しい思いをしていましたが……）。

　私は今までいろんなスポーツ選手を見てきましたが、〝ハンサムな選手は逆境に弱い〟という自論を持っています。試合中はこちらが話しかけるのをためらうくらい怖い顔をしてくれたらな、と感じました。

　整形外科医として帯同した立場上、日本選手の障害についても触れなければなりません。まず、ハンドボールというスポーツの種目特性を考える時、まず最初に頭に浮かぶことは、重量約４５０ｇという重いボールに時速１００㎞を超えるようなスピードを与えてシュートしなければならないという事でしょう。そのために、当然上肢への負担が大きく、特に肩関節に障害を持つ選手が多いようです。これらの選手の殆どが肩関節の前方への動揺性を有しており、前方支持機構の強化と同時に肘の下がる投球フォームの改善が望まれます。

　アジア各国の選手を観察すると、強いシュートを撃てる選手はやはり肩周囲の筋肉の発達が良く、中でも僧帽筋・三角筋・広背筋の発達が目につきました。シュート練習だけでは特定の筋肉しかつきませんから、これらの筋肉を総合的に強化するにはウェイト・トレーニングが大切であると考えます。



声援を送る現地日本人会の皆さん

　また、腰痛を訴えたり、過去にその既往のある選手が多くみられました。ジャンプして上体を捻りながらシュートを撃つ機会が多いハンドボールでは、腰椎への負担が大きく、腰に障害を持つ選手が多いのは当然だと言えるでしょう。ひと口に腰痛と言っても種々の病態がありますが、今回のメンバーを診ると、腰椎椎間板ヘルニア・腰椎分離症・腰椎椎間関節症等々、腰椎疾患のデパートにいるようでした。個々の病態は異なっても、共通して言えることは、治療と予防には腹筋・背筋のバランス良い強化が必要だという事です。さらに、利き手側と反対側との背筋のアンバランスにも注意を要すると思われます。

　下肢に関しては、他のスポーツの多くと同様に、膝関節と足関節に障害が多いようです。急激な方向転換を要求されるスポーツですから、足関節の捻挫などはおそらく日常茶飯事なことでしょう。今回の遠征中は、帯同された藤井トレーナーの適切なテーピングを受けておいたお陰で、新たに捻挫する選手はいませんでしたが、日頃の練習や試合でも必ずテーピングやブレースの装着を心掛けて欲しいと思います。また、中等度以上の捻挫をした際には、腫脹と疼痛が消退するまでの２～３週間、思い切って練習を休む勇気も必要だと思います。

　その期間に先に述べた上肢・体幹の筋力強化に専念すれば、長い

目で見たとき決してマイナスにはならないと思います。

今回優勝した韓国チームを観察してみると、指にテーピングをした1選手を除いて、テーピングやサポーター、ブレースを着けた選手が見当たりませんでした。少なくとも大きな故障を持った選手がいないということは、チーム力の大きな要因のひとつであると言えるでしょう。

ひとたび大きな外傷や障害が生じると、どんな名選手とどんな名医をもってしても、100％元の状態に戻すことは大変難しいことです。これは、我々が日頃診療にあたっていて痛感していることです。故に最も大切なことは、外傷・障害の発生を予防するということです。

帰りの飛行機の中で選手達に話を聞くと、帰国後すぐに日本リーグや学生リーグの試合が待っているそうで、かなりハードなスケジュールをこなしていかなければならない様です。疲労は外傷や障害の発生率を高めるだけでなく、その予防のための筋力トレーニングも効率が悪くなります。過密スケジュールをなるべく避け、選手ひとりひとりが自制心を持って、疲労回復のための努力と工夫を怠らないよう望みます。

今回の遠征期間中、選手が自主的に体調の自己申告表を作成していました。自己の状態に目を向け、これを把握して自他共に知らしめることは大変素晴らしいことだと思いました。そのためか、この期間中に風邪をひいたり、消化器系の不調を訴える選手は殆どいませんでした。今後も選手各人がこのような心掛けを忘れず、背中に背負った日の丸の重さを自覚して自己管理にあたってくれることを期待します。

最後に、アジアの王者奪還に向けて各人のさらなる奮起を期待し、私自身も微力ながらそのお力になれれば幸いと考えております。

苦労多かった中東スタイルの運営

国際審判員　後藤　登・清水　宣雄

9月21日夜、日本選手団と共にペルシャ湾に浮かぶ小さな島国、バーレーンに到着した私達を、バーレーン・ハンドボール協会代表のアサド氏や、日本人会の人々が温かく出迎えてくれた。

空港で荷物を手にすると、旧知のバーレーンの国際審判員の宿舎ラマダホテルに向かった。夜11時を過ぎているというのに、暑さと、眼鏡が曇って何も見えなくなるほどの湿度に、先が思いやられた。車の中でスワイド氏から「日本のB級審判員は、何故今回のトレーニングコースに参加しないのだ」と突然話があり、その件について事前に何も聞かされておらず驚いた。

22日はホテルにて旅の疲れをいやし、23日の午前に、日本選手と共に練習会場のアリ・アハリクラブで汗を流して体調を整えた。

24日10時から、審判会議がホテルの会議室で開かれた。アジア連盟審判長、韓国のパク・チャンジョ氏から国際連盟の競技規則委員会(PRC)副委員長、ノルウェーのオイビン・ボルスタット氏が紹介され、大会参加審判員の大きな拍手で迎えられた。今大会の審判は、IHFからデンマークのエルブロンド・ロヴクヴィストペアとドイツのビューロー・リューブカーペアが招待され、他にイラン、クウェート、カタール、バーレーン、中国、台湾、そして日本の9ペアが担当した。

今回の審判団をみると、世代交代の時期が訪れたことを感じた。ボルスタット氏の説明にもあったが、IHF・PRCは、アトランタオリンピックに向けて、SRA96と呼ばれるトップレフェリー集団の選出をスタートさせており、96年に50歳を超える者は、それから自動的に除かれる。

従って各国とも、このSRA96を意識した国際審判員のランク付けを行っており、例えば、ドイツのトーマス兄弟（バルセロナ五輪女子決勝審判員）は、既に国内4位となっている。

今回のゲストレフェリーのランク付けも新しいものであり、未だ真の世界のトップレフェリーでは無いと思われる。

5月に来日した現在世界ナンバーワンといわれるスウェーデンのペアと比較すると、若干の経験不足が感じられた。残念ながら、私達のペアとしての経験はそれよりも少ない。

初日の審判会議は、新ルールの確認や、ベンチコントロール等について話し合った後、大会第1日目の担当審判員、控え審判員を発表して終えた。この後、大会期間中6回の審判ミーティングがもたれ、途中から国際B級のトレーニングコースのメンバーも参加して意見の交換を行った。その内容については審判委員会を通して後日報告したい。

私達ペアは、大会4日目の台湾対サウジアラビア戦を初めに、クウェート対アラブ首長国連邦戦とインド対カザクスタン戦の3試合の審判を担当した。試合会場は冷房がきき、到着時心配だった暑さや、湿度も問題にならず、選手・審判員とも快適に試合を行えた。

大会途中から、バーレーンのタイムキーパー・スコアラーにミスが多いという理由から、テクニカルコミティの提案で、重要な試合のタイムキーパー・スコアラーを大会審判員が行うことになり、私たちも3試合の割当があった。

大会全体の印象は、全てが中東スタイルで行われ、全ての文章はアラビア文字がメインであり、アラブの人々のIDカードは、アラビア文字でのみ書かれ、試合前に提出するメンバー表もアラビア文字だけで書かれたものが少なくなかった。

試合に関する情報も少なく、全チームのメンバーや、試合結果の広報サービス等も一切無く、またスケジュールの発表や変更が突然行われ、苦労させられた。

最後に、日本選手団の一員として、お世話になった蒲生監督をはじめ全日本スタッフの皆様に感謝し、また大砲を欠き、怪我と戦いながらも全員一丸の素晴らしいチームプレイで銅メダルを獲得した全日本プレイヤー達に、「よく頑張った！」の言葉を贈り結びとしたい。

現地邦人の観戦記

バーレーンでの日本代表

住友商事㈱バーレーン　田中　良輝

以下は、私の独断と偏見によるレポートです。

好プレー後の個人名コールが多かったのは、橋本・田中雅・田中茂・三輪（チームで一番顔が大きいが本人は否定）の4選手。特に橋本・田中茂両選手には、黄色い声（持主の中心は30代の奥様方）がたくさん飛んだ。

負傷の痛みに耐えてプレーし続けた源内選手の闘志は、感動的であった。芸はイマイチだったが、佐藤選手の元気は五重丸。おかげで私の娘は日体大志望に。冗談でGKの真似をした私の足に球を命中させた末岡選手の優しさには、感謝の一言。

プールでパンツを脱がされそうになった最年少の坪根選手は、新調する破目になったコンタクト・レンズを装着して見事PSを阻止。これだけ役者の揃った選手達をまとめる蒲生監督及び関・田口両コーチの指導力は、絶賛されてしかるべきであろう。

選手団の皆さんを最早他人とは思えなくなった当地日本人は、日本チームの今後の活躍を心から祈っています。皆さん、頑張って下さい！



ハンドボールがトレンド

住友商事㈱バーレーン　河野　浩平

今年、バーレンの夏は熱き2週間で締め括られた。「ハンドボールにどれだけの在留邦人が関心を持ってくれるのか、そして会場に駆け付けてくれるのか」不安だった。が、自称スポーツプロモーターはめげない。日本ハンドボール協会とのコンタクトを開始し、選手たちのプロフィール等の載る機関誌コピーをスポーツ観戦愛好者に配り始めたのが、8月の初めであった。

8月末、蒲生監督よりお電話を頂く。日本ハンドボールの第一人者からのお願いは『にぎり』であった。試合の数時間前に、選手たちにスタミナをつけさせ、気合いを入れる為に是非実現したいとのことだった。

バーレーンのご婦人方には、スポーツ観戦好きが少なくない。日本チームの為に「にぎりたい」という人数はアッと言う間に20数名集まった。

9月21日夜、日本チームは蒲生監督を先頭に、韓国チームと呉越同舟でバーレーン空港に到着する。我々は、大会本部のはからいでサテライトに入れてもらい、先に到着した田口コーチと一緒にゲートの前で「ガンバレ日本」の横断幕を掲げる。

空港から出ると湾岸特有のムッとした湿気が襲う。「アッチー（暑い）」という選手の声もちらほら。

9月25日(土)、クウェート戦。邦人約80人が応援に駆け付けてくれる。応援団長（小出先生）の指導のもと声援が送られたが、後半逆転され惜敗。くやしい。

9月26日(日)、イラン戦。格下の相手だが、前日の敗戦の影響か、どうも選手に元気がない。日本人学校勢を欠く応援団だったが、皆の必死の応援も届き、何とか逃げ切って勝利を収めてくれた。

9月28日(火)、中国戦。メインラウンドの第一戦。日本人学校も関係者の御厚意で終業時間を繰り上げ、応援に駆け付けてくれる。惜しくも追撃届かず敗戦。

9月30日(木)、韓国戦。王者韓国に一度は引き離されたが、よもやというところまで追いすがる。結果は負けであったが、活気の出てきた日本チームに何かスッキリとしたものを感じる。

10月1日(金)、カタール戦。待っていた歓喜の瞬間。選手のガッツポーズに邦人応援団も一体化し、ワッショイワッショイの大盛り上がり。12点差の大勝を収め、中国・カタールと1勝2敗で並んだが、得失点差でセミファイナルへの出場を決める。美味いビールにありつけた。

カタール戦の翌日は、日本人学校でハンドボール教室を開いて頂く。先生もビックリの蒲生監督の子供へのご指導で、子供達は最高の時を過ごす。代表キーパー相手にシュートを打った思い出は、一生の宝である。激励会で選手たちのパフォーマンスも盛り上げてくれた。ホテルにお送りした時に、蒲生監督からの「バーレーンは最高」というお言葉に感激。

10月3日(日)、準決勝、クウェート戦。出だしからのクウェートペース。そのままゲーム終了。

10月5日(火)、三位決定戦、サウジ戦。まさに守護神・橋本デーと言わんばかりにサウジのシュートを止めまくる。大勝で銅メダル。

正直、ハンドボールの試合をナマで観戦したのは初めてだったが、スピード感・激しさに魅了されたのは私ばかりではなかったろう。バーレーン邦人では既にJリーグブームは去り、ハンドボールがトレンドとなっている。日本チームが帰ったあと、バーレーンの夏も去りはじめた。広島では金メダルを。

総評

「出会い　競い　そして未来へ」の東四国国体終わる

東四国国体審判長　大塚　文雄

東四国国体のハンドボール競技は「出会い　競い　そして未来へ」をスローガンとして、香川県の高松市・綾上町・香川町で郷土の栄光をになって熱戦が展開された。地元、香川県はこの日の為に何年にもわたる強化が実り、各種別で実力を発揮し男女総合「天皇杯」、女子総合「皇后杯」を獲得し、感激の中、石原強化委員長が「ブロンズ像」を手にした。

私は、本大会審判長として代表者会議で次のことを監督・選手達にお願いした。日本の男女がアジアの王座を取り戻すには、まず競技人口を増やさなければならない。そのため小学生・中学生そして高校生に感動を与えるようなプレーを見せてほしいと。それを故意の汚い反則や、審判の判定にいちいち文句を言っていたら、誰もハンドなんかやる気にならない。しかも世の中子供の数が減っており、Jリーグや、W杯サッカーブームで子供たちの話題は「サッカー」「サッカー」そんな中1人でも多くハンドボールの世界へ……。そのためお互いにスポーツマンシップにのっとり正々堂々と試合をしてもらいたい。

こうお願いした為ではないだろうが、今大会実は素晴らしい試合が多く、市長さん、町長さん、そして実行委員会の皆さんが、「ハンドボールを引き受けて本当によかった。正直こんな素晴らしい大会になるとは……」と興奮のおももち。まさにスローガン通り「素晴らしい出会い、競いあった後のさわやかさ、これぞ日本ハンドボール界の未来は明るいぞ！」

＊　＊　＊

試合

成年男子1部

（22チーム参加　高松市開催）

日本リーグの湧永・日新でかためた広島選抜が圧倒的な力を発揮し、国体4連覇を達成した。地元の讃岐クも準々決勝で、三重県代表本田技研を相手に後半15分まで2点差と大健闘したファイトに拍手を送りたい。

成年男子2部

（16チーム参加　高松市開催）

成年2部はどこが本命かわから

ないまま白熱した試合が続き、動員見学に来た中学生、高校生を喜ばせた。中でも1回戦地元・香川ク対愛知選抜は後半10分まで1点を争う好ゲームで、どうしてもリード出来ない香川クは初戦で沈むかと思われたが、その10分から何と9連続得点をあげ、ゲームをものにした。しかしこの試合愛知GKの好守は見事であった。この香川クは決勝では、圧倒的な力の差をみせつけ埼玉選抜を寄り切り開催県に栄冠をもたらした。

成年女子

(10チーム参加　綾上町開催)

綾上町での開催で町をあげての応援合戦でスタンドもおおいに盛り上がった。当初実行委員会では山の上にあるグラウンドで果たしてどの位見にきてくれるかが、頭痛のタネであったようだが、いざふたを開けてみれば民宿のせいもあってか、宿泊した家のおじさん、おばさん達がハッピ姿で「フレーフレー○○」笛とタイコの応援はグラウンドより熱が入っていた。

成年女子は昨年「べにばな国体」で殖産銀行が優勝したため今年の香川銀行クも注目されたが、何といっても日本リーグ勢の壁は厚かった。決勝の熊本県(オムロン)対三重県(ジャスコ)の対決は立ち上がりから両チームボールが手につかずミスがめだったが、その後オムロンは速い攻撃でジャスコの守りをくずし比嘉・石村・内村が着着と加点し主導権を握りそのままジャスコを振り切った。熱き女の戦いは準決勝で地元香川銀行クが試合巧者ジャスコに挑戦。後半13分まで12－12の大接戦。最後は総合力にまさるジャスコが勝島・土師らのシャープな動きに敗れはしたものの、笠井主将を中心にさわやかなゲーム運びに応援のおじさん・おばさん達にタメ息をつかせた。

少年男子

(16チーム参加　香川町開催)

Aゾーンは高校総体優勝の富岡高で固めた群馬選抜が2回戦で地元香川選抜の前に散り、早くも混戦模様。しかし久留米工大附で固めた福岡選抜が、バランスのとれた攻守で強豪香川選抜をも下し決勝へ進出。

Bゾーンはトリッキーなパスワークで横浜商工主体の神奈川選抜が準々決勝で優勝候補の一角山口選抜を1点差で敗り、高校総体2位の大分電波をも撃破決勝に進出。

決勝戦ではオーソドックスな攻めの福岡対目まぐるしいパスワークで相手ディフェンスを翻弄する神奈川の対決は、前半福岡が神奈川のパスワークが読めず、12－10とリードを許すが、後半福岡この攻めを読み、チャージングの反則を誘い、小兵諸岡のポストシュート、速攻とたたみかけ勝利をものにした。まさにクリーンな攻防の中に緻密なパスワーク、ハンドボールの面白さを十分に伝えた、素晴らしい戦いであった。

少年女子

(16チーム参加　香川町開催)

香川町で開催された少年女子の試合も1回戦から手に汗握る好ゲームが続き満員のスタンドは声援と悲鳴でわれんばかり……。予想では夏の女王名古屋短大附で固めた愛知選抜が絶対の本命。そして高校総体の決勝で惜しくも涙を流した石川県(小松商)も優勝候補。

しかし2回戦で小松商が茨城選抜に敗れる波乱があり、どこが愛知選抜に挑戦するのか興味シンシン。

地元香川選抜は1回戦福岡選抜に27－10と快勝し、続く2回戦で決勝進出の鍵を握るとみられた大阪高校選抜にも21－9と快勝、波に乗る。準決勝は天皇陛下ご臨席のもと茨城選抜と対戦し、これまた撃破。決勝に駒をすすめる。

決勝戦の愛知選抜にはエース児島という超高校級のプレイヤーがおり、前半香川は児島にマンツーマンディフェンスをかける。しかし児島は自由自在。固い雰囲気で前半を終わるが12－8愛知リードのうち7点を児島にもぎとられ、なすすべがない。しかし後半に入り香川本来の「守って速攻」のリズムを取り戻すが、完全に児島に振り回され、地元優勝という大きな魚を逃した。

香川選抜の前田監督は、これまで心を鬼にして選手を鍛えたようであるが、夜のテレビ・スポーツ番組で泣きじゃくる女子選手に、監督も涙を流しながら「お前等、試合で負けたけど、日本で2番なんだぞ！」「泣くな！胸を張れ！」と何度も繰り返し、選手をいたわっていたところが放映されていたが、まさに前田監督の心をのぞいた気がした。

審　判

東四国国体審判努力目標

1　アドバンテージルールの適用
2　7mスローの判定
3　攻撃側の反則の見極め

1　アドバンテージルールの適用については、各審判員ともプレーを生かした笛を吹いていた。しかしながらディフェンスの反則で笛を吹いたとたんノーマークの所にパスが繋がり審判はしまった、と思いながらもあまり自分を正当化しないほうがよい。

2　7mスローの判定については相手チームに1点与えるかどうかに繋がるので、しっかり見極めてほしい。

★攻撃側が反則されたが、アドバンテージで流しシュートミスをしたので7mスローに戻しているケース。

★明らかな得点チャンスでないものを7mスローに判定するケース。

・カットインでボールをキャッチしようとする際の反則。

・フェイントで相手を抜くときの反則。

・反則があったが笛が遅いために、笛が吹かれた時には攻撃側がもつれ込んで得点のチャンスになってしまう。

★ライン内防御で明らかに相手に押し込まれたものが7mスローに判定されてしまう。

3　攻撃側の反則をきっちり判定しないとディフェンスは守りきれなくなりつかんだり、かかえたりするので、クリーンハンドボールのためにも、しっかり見よう。特にチャージングで攻撃側が右利きでフェイントをかけ左へ抜く時のプレーに身体で押し込んでいる(チャージング)ケースがもうすこしあるのではないか。

4　その他の今後の課題

★審判の位置どりの研究

★2人の審判員の任務の分担についての研究

東四国国体が始まって2日目ライバルと見られていた愛知・大阪・石川などがバタバタと敗れ去り香川県の総合優勝がアッという間

に決まってしまった。こんなに早く地元の総合優勝が決まったのは例がないらしい。清水日本協会理事・神田大阪協会会長・柳井教職員連盟副会長らも記憶にないという。その位に地元を中心に盛り上がった大会になったが、更に盛り上げたのは、天皇陛下に久しぶりのご臨席を賜り少年女子、香川選抜と茨城選抜をご覧いただいたことである。地元香川県協会松原理事長のご説明に陛下も身を乗り出して熱心にご覧になられていた。陛下はチャージングとラインクロスの反則でボールの方向が変わってしまうのがご理解いただけなかったようである。また、最終日には、ハンドボールファンであられる紀宮様もお越しになり中澤専務理事の解説に熱心に耳をかたむけられていた。このように一つの大会に陛下と皇族の方がお見えになられたのも多分初めてのことであろう。陛下がそして紀宮様がお越しになられたその瞬間、香川の皆さんは今までの苦労が報いられた瞬間でもあったろう。

最後になりましたが、大成功のうちに終了したこの大会を陰で支えてくれた地元ハンドボール協会役員、実行委員会の皆様、補助員の高校生、ボランティアの方々、まさに総力を上げての「ブロンズ像」であった。

本当に長い間、ご苦労様でした。本当におめでとうございました。

第48回国民体育大会秋季大会　ハンドボール競技　成績一覧表

種別	優勝	2位	3位	4位	5位	5位	5位	5位
成年男子1部	広島県	三重県	埼玉県	愛知県	福島県	沖縄県	京都府	香川県
	広島県選抜	本田技研	大崎電気	大同特殊鋼	福島選抜	パームヒルズクラブ	京都クラブ	讃岐クラブ
成年男子2部	香川県	埼玉県	広島県	千葉県	岩手県	東京都	奈良県	北海道
	香川クラブ	埼玉選抜	広島県選抜	千葉選抜	不来方クラブ	㈱三景麹町	大瀬クラブ	北海道選抜
成年女子	熊本県	三重県	山梨県	香川県	愛媛県	大阪府	山形県	石川県
	オムロン	ジャスコ	シャトレーゼ	香川銀行クラブ	愛媛選抜	大和銀行	殖産銀行ハンドボールクラブ	北國銀行
少年男子	福岡県	神奈川県	香川県	大分県	群馬県	大阪府	山口県	茨城県
	福岡選抜	全神奈川	香川選抜	大分電波高等学校	群馬選抜	大阪高校選抜	山口県選抜	茨城選抜
少年女子	愛知県	香川県	千葉県	茨城県	京都府	宮城県	大阪府	石川県
	愛知選抜	香川選抜	千葉選抜	茨城選抜	京都選抜	聖和学園高等学校	大阪高校選抜チーム	小松商業高校

国体報告

開催県として国体を振り返る

香川県ハンドボール競技委員長　松原　忠

思えば昭和53年に香川県議会において、国体誘致を決議、第45回国民体育大会の西ブロック開催地区調整についての協議会において昭和68年第48回国民体育大会は四国ブロックとすることを調停、四国四県体育協会長において2県共同開催案を承認する。そして、昭和60年度第2回香川・徳島体育協会長おいて、両県の種目が合意にいたり、ハンドボール競技が香川県において開催することに決定する。62年、香川県国体準備委員会において競技会場予定地の決定にいたる。62年には、中央競技団体より正規視察をうけてから、競技会場の準備打合せが本格的にはじまりました。

平成元年には香川県準備委員会において、テーマ、スローガンを決定し、「出会い、競い、そして未来」をスローガンに着々と準備を進めていきました。

そして、リハーサル大会の誘致準備、開催計画の準備に入り、テーマの「出会い、競い、そして未来」のスローガン決定記念展を開催し、県民に国体開催をアピールし、理解を求める。香川県ハンドボール協会としては、第48回国民体育大会ハンドボール競技内定記念行事として日本リーグ高松大会を開催し、開催内定の高松市、綾上町、香川町、一市二町の理解を深めることにする。

平成2年には、一市二町に国体準備室及び実行委員をおき、一市二町の協力体制をととのえ、各連絡協議会を密にして開催準備に本格的に入る。同時に県ハンドボール協会としては、競技力の向上、対策強化委員会の組織の充実をはかり強化に一段と力を入れる。

そして、平成2年には石川県で実施された第46回国民体育大会ハンドボール競技リハーサル大会を視察し、一市二町の組織の充実をはかり理解をえることにした。

平成3年3月より本格的にリハーサル大会国体本番にむけての取り組み等について、県ハンドボール協会、一市二町の事務連絡会を実施する。又、平成3年にはリハーサル大会、4年には山形国体を共同で視察し、開催準備に一段と力を入れる。

平成4年8月には本番なみの国体リハーサル大会を高松市、綾上町、香川町で実施し、台風の中で行われたが無事終了することができました。そして競技においては、男子の教職員チームが優勝し、又、女子チームも準優勝という成績をのこし、強化も着々と進歩、充実してきた。思えば、運営面の充実、強化の充実の成果が着実に出てきた結果だと思い自信を得る。

さて、本番の行われた高松市は、香川県の中央に位置し、東に屋島、西に五色台、南は緩かやな勾配をたどる讃岐山脈に連なり、国立公園の瀬戸内海に面する豊かな自然に恵れた小都市で、成年一・二部を実施し、成年女子は、県の東北部に位置し、緑豊かな盆地で実施し、少年男女は讃岐山脈にかこまれた丘陵で自然環境に恵まれた町で実施しました。

ハンドボール競技会の運営は一市二町の協力、競技役員、補助員の協力により充実した運営ができ、又大会の成績も総合優勝という輝かしい成績を上げることができ満足しています。これも関係者一同の御協力のおかげだと思っています。

最後に40年振りに国体を迎え、全国各地から若人の精鋭を迎え、「出会い、競い、そして未来」をスローガンのもとに、一市二町で第48回国民体育大会ハンドボール競技が開催され、数々の感動と友情の輪を広げ、素晴しい成果を収めて盛会のうちに終了することができましたこと、これひとえに各機関、国体並びに皆様の御指導、御協力の賜であり、心から感謝申し上げるとともに御礼申し上げます。

県ハンドボール協会は、本大会で得た数々の貴重な体験と教訓を十分に生かし、今後ハンドボール競技の充実発展のために一層努力する所存でございます。

終りになりましたが、関係の皆様には今後とも変わらぬ御指導、御支援下さいますようお願い申し上げます。

指導委員会・審判委員会からのお知らせ

平成5年度

コーチ・レフェリーシンポジューム

期日　平成6年3月11日(金)～13日(日)
開会　平成6年3月11日(金)　13:00
閉会　平成6年3月13日(日)　12:00
場所　東京　駒澤大学

テーマ

「ハンドボール　2000」
――将来のハンドボールをめざして――

内容(予定)

- ●基調講演
- ●講演　サッカー関係者
  メディア関係者
- ●提言　ハンドボールの未来
- ●指導者分科会、レフェリー分科会
- ●合同分科会「レフェリングをめぐって」
- ●新しいコーチングめざして
  カウンセリング
  栄養のバランス
  傷害の予防等（交渉中）

参加資格

- ●都道府県の指導者組織の代表者
- ●都道府県の審判組織の代表者
- ●公認指導者資格取得者、公認レフェリー
- ●日本リーグチーム関係者
- ●都道府県協会、各連盟推薦者

問い合わせ

日本ハンドボール協会事務局内、指導委員会、審判委員会（☎03-3481-2361）
昭和薬科大学体育学研究室　江成元伸（☎0427-21-1582）
駒澤大学体育研究室　村松　誠（☎03-3418-9433）

女子ジュニア世界選手権
それぞれの海外体験

ボランティア家族

コーチ　田中　俊行

8月26日からチェコでの最終調整を終え、9月1日14時に現地入りをした私たちは、大使館役員、通訳、大会期間中のサポーターの熱烈な歓迎を受け、とにかく無事にブルガリアへ着いたことにホッとしていました。バッゲイジのトラブルとホテルまでの5時間のバス行程にうんざりしながらも、到着日はこんなもんだと自分に言い聞かせつつ、明日からの日程に備えました。つまらないことでコンディションを崩さないよう、また、盛り上がってきているチームの機運を大切にしたいということが切実な思いでした。

大会への不安と緊張が高まる中で、特筆すべき事は期間中に絶えずチームに同行していたボランティアの方々の支援についてです。90年のソウルでの世界選手権の直前に、私の所属チームでブルガリアのナショナルチームと合同練習をした機会がありました。チーム自体は〝大型でパワフル〟なチームではありましたが、経済的なハンディがあるにもかかわらず、その人柄、純朴さ、陽気さはたいへん印象に残っています。今回出会った人達もその人なつっこさは変わらず、何かとリラックスした雰囲気をつくってくれました。

その中心となったのが、大会本部との連絡・調整係であったリリーさんの家族です。ジュニアの陸上競技のトレーナーをしているリリーさんは、やり投げの元代表選手。旦那さんがサッカーのナショナルチームのマッサーをしていることもあり、息子のジョージとネストロを加え、家族総出での歓待を受けました。特にジョージとネストロの屈託のない笑顔は、日本チームのマスコット的存在でありました。天王山の中国戦を控え緊張した面もちの我々に、心配したのか「キャン　ユー　ゲット　アウィン　フロム　チャイナ?」という質問をしました。私はとっさに「イエス　アイ　ホープ　ソー」と返しましたが、彼は強い口調で「ノー　アイ　ビリーブ!」と言い、つたない英語で選手を励ましてくれたことが大変印象に残っています。

ブルガリア国内の失業率の高騰、貨幣価値の低下、治安への不安という社会情勢をもかいま見た今大会。そのような状況にもかかわらず、常にチームに同行し、我々の要望に嫌な顔ひとつせずに応えてくれたリリー、ガービー、オルディー、ジョージ、ネストロの好意が、どれだけ我々を勇気づけ、希望を持たせてくれたか計り知れないものがあり、感謝の念にたえません。

見送りをするため午前4時にホテルへ来ていたリリーの「アイム　サッド　コウズ　ライク　ファミリー」という言葉が、今も頭に残っています。

喜びと悔しさを味わって

山崎　智美

12位という結果で終わってしまった世界ジュニア選手権では、喜びも悔しさもあり、いい経験をしました。

初の国際試合で、まずは自分のシュートが決まるまで気持ち的に不安だったし、DFも自分の身長より何10センチも高い人を守るのに苦労しました。でも試合をこなしていくうちに何本かシュートが決まったり、DFでしっかり守れた時は、自信にもつながりました。

なんと言っても、やはり勝つ事のできた試合は最高に良かったです。

上位リーグ出場をかけての中国戦。前半は互角で同点に終わり後半30分、連続得点から日本のペースで試合を展開することが出来て3点差をつけて勝つことが出来ました。

上位リーグでの試合ではドイツ戦を1点差で勝つ事ができて、すごくうれしかったです。初めてヨーロッパチームを負かす事ができたし、もし次のウクライナに勝てたら7、8位が決定されるという希望が出てきました。しかし、ウクライナ戦は勝つ事が出来ずに、11、12位決定戦に決まりました。オーストリア戦はリードし続けていて、このままいけると思ったのに、攻めきれずに連続失点や退場などが重なり、同点で試合終了。第1延長も同点、第2延長で1点をリードされ、そのまま試合が終わり12位が決まりました。本当に悔しくって、負けを確認するのが嫌でしょうがありませんでした。最終ゲームを勝ち取って、みんなで笑えなかったことが本当に残念に思います。

今までこのチームで何度も合宿を組んで、そして今大会まで全員が力を合わせてやってこれて良かったと思います。このジュニアのメンバーに選ばれ、世界選手権に出場することが出来てすごく光栄に思います。

1点の重みを痛感

野村　奈美

私にとって初めて体験する世界ジュニアへの出場は、世界のプレーを自分の体で接触できる一番よい勉強の場でした。まず初めてプレーヤー達を見て思ったのは「大きい」ただその一言でした。

日本では私が町を歩いていると大きいと言われ続けてきたのに、会場へホテルへ着くなり私は、普通の背の高さになってしまうのでした。ですからゲームもどの選手を見ても勉強になりました。第一試合にあたった日本は、負けてしまっても試合後は生き生きしてたと思います。スピードがあって、力があって、走る力も根性も日本にとってすべてがそろっていると感じ話していたのです。次の対策はどうすべきか、どう攻めたらDFは崩れるか、楽しく、そして真剣に話しました。足を使ってくるから速攻は行ける!!と確信した時と、あとはセットでコンビを合わせて行く。高野先生と田中コーチが本当によく考えて下さって、それに私達はついていきました。

「試合をしているのはお前達だ。悪いムードの良い悪いもあるが、悪い時には悪いなりにどうすべきか、自分達で考え、言い合い、良いムードにして行け」高野先生がそう言われた時、私は言われるままにやっている中・高生、そして実業団とは違うな、先生は本当に考えて下さっているなと思いました。

最終的には12位という平凡な結果と、何もできなかった自分の力のなさに悲しみはありますが、点を取れた時のうれしさ、ゲームをする楽しさ、楽しい仲間に恵まれたこの大会への出場は、一生の思い出となります。

1点の重み、私はこれで二度実感する事になりましたが、現チームに戻ったら、苦しい事がこの旅の何倍もあると思います。でもこのチームでハンドボールの情熱がますますあるのを実感した事を忘れず、チームに少しでも貢献していけたらと思います。そして、むこうでできたHANDBALL FRIENDを、いつまでも大切にしていきたいと思っています。

私の初海外遠征記

森川　直子

高校3年生の時に、ジュニア選考会の通知をもらって、はじめてその存在を知りました。何回かの選考会をやってみて、自分の力のなさを思い知らされました。それから、ひざのじん帯を切ってしまって参加できなくなりました。ようやく、ケガも治って復帰した時、合宿の通知をもらって、とてもうれしかったです。

しかし、合宿ではあまり自分を出すことができなくて、合宿が終わるごとに落ち込んでいました。それでも、最後のメンバーまで残らせてもらえて、うれしく思います。

そして、はじめての海外遠征を体験させてもらえました。韓国では、まず勉強になることが多いだろうと思いました。日本人と身長も体つきも変わらないのに、スピードとフェイント力があって、さすがに世界上位の国だと思いました。

チェコスロバキアでは、自分達より身長も体重も大きな選手を相手に、どれだけ自分達の力を出すことができるのかと思いました。3試合をやって、1試合は体調をくずしてしまって参加できなかったのが残念でした。他の2試合をベンチで見ていて、スピードと全員でやるハンドボールをやれば勝てると思いました。

そして、ブルガリアでの世界選手権をむかえました。１戦目のルーマニア、２戦目のロシアには負けてしまったけど、第一の目標だった中国に勝つことができ、上位リーグに進み、そこでもオーストリアにはもう少しのところで涙をのんだけど、ドイツに勝てて、本当によかったです。

私自身は、試合にはあまり出られませんでした。出させてもらってもシュートを外してしまったりして、あまりチームの役に立つことができなかったのが、心残りです。でも、このジュニアのチームで学んだことを生かして、これからホームチームでも、頑張れるように努力したいと思います。

中国に勝って泣きました

中井　美世

私が初めてジュニアに入ったのは高２の時で、私にとってジュニアの存在はとても大きなもので、高いレベルの人とプレイできるのがとても楽しみでした。さすがに初めての自分は、上手い人ばかりの中でプレイする事に対して情けなさを感じました。でも何とか自分のチームに帰って、今度は役にたてるようにと、自分自身で必死に練習しました。

ジュニアに入れてもらい３年目ですが、今回のチームは本当にいいチームでした。明るくて、上下の関係も少なく、ハンドボールの練習にも集中でき、切り換えのあるチームでした。私はジュニアに入って、ハンドボールに対しての好感がよりいっそう深まりました。このチームなら何年間も合宿していいくらいです。

みんながレベルの高い人ばかりで、自然にハンドの話をしていたり、くやしい所は全員がくやしがったり、そういう雰囲気が好きでした。練習中では失敗をすると怒られたり、出来た時には心から喜んでくれたり、自分自身キーパーをしていて、参考になる所がたくさんありました。

さて、今回の世界選手権では、12位という結果で幕を閉じたわけですが、まず目標は中国に勝つという目標で出発し、その中国を倒した時には、みんなで抱きあい涙を流し喜び合いました。そういうみんなの姿を見て、私は涙を止めずにいられませんでした。全然違うチームから集まってきているのに、みんなで中国を倒したという感じがしました。ドイツにも１点差で勝ち、信じられないくらいでした。

私は試合中キーパーに入っていて、絶対止めるという気持ちで必死でした。惜しくもウクライナとオーストリアに負けてしまいましたが、あのくやしさをバネにして、これからもがんばっていきたいです。私自身の目標は高レベルの人といっしょにプレイでき、「日本」のマークをつけた全日本選手になりたいです。

最後に高野監督をはじめ田中コーチ、スタッフのみなさん、どうもありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

いつかはナショナルチームで…

小松　真理子

今、ジュニア選手権を終えホッとしました。自分は全然チームに対して貢献できなかったけど、世界の壁の厚さというものを知ることができて、とても満足した気分です。

今までイベントなどの雑誌なんかでしか知らなかった世界が、間近で見て勉強できたのがすごくうれしいです。

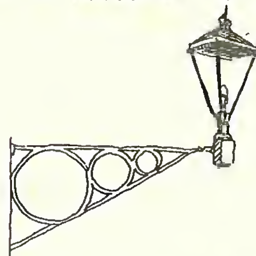
自分は、今回初めてジュニアの選考合宿に参加させてもらいましたが、最初に思ったことは「さすがジュニアに選ばれるだけのセンスをもってる奴らだな。絶対負けない」でした。高校の２年の時、ジュニアというものを知り、いつか日の丸をつけて世界を見たい、世界を相手に戦いたいと思っていました。

最終選考の結果を知ったとき、自分はとびあがって喜びました。自分の前からの夢が一つかなったからです。「よし、世界の広さが見れるぞ。ハンドボールを勉強できる。がんばらなきゃ」と思いながら、世界選手権の前の合宿の韓国遠征に臨みました。韓国は、トップレベルの所なので、学ぶべき点がいっぱいありました。韓国の遠征で、自分は納得のいかないプレイをしてホテルでくやし泣きしたこともありました。メンバーに入りたい一心で、ホームチームに戻ってからがんばりました。

世界選手権前のチェコでの合宿では、最悪なコンディションで、チームのみんなに迷惑をかけてばかりで、思わず涙が出てきました。

世界選手権の予選リーグで、中国に勝てたことが一番うれしかったです。自分はそのときベンチに入れなかったけど、メンバーのみんなと同じコートで戦ってきたつもりです。ドイツと中国に勝てたことを、自分は誇りに思ってます。オーストリア戦は、延長２回までいって負けてくやしい思いをしましたが、このくやしさをバネに、次はという闘争心でいっぱいです。これからナショナルでプレイできるように努力してがんばります。そして、メンバーに入り、また世界を見て勉強したいです。

田口隆の
ドイツ研修レポート



スウェーデンのトレーニング

今回はスウェーデンのトレーニングゲームを見る機会が得られたので、その模様をご紹介したいと思います。

バーレンで開催されたアジア選手権に全日本チームと共に参加したのち、再びドイツへ戻り、10月9日から18日にスウェーデンのVästerås という街（ストックホルムから西へ約100kmぐらいのところ）にあるIRSTAというチームで、トレーニングとゲームに帯同してきました。

このチームはいま、強くなろうとしているチームで、監督としてClaes Hellgren（彼は80年代にスウェーデンのナショナルチームのGKとして活躍し、スペインなどでもプレーをし、その後1年半ほどアメリカでスポーツトレーナーの勉強をし、2年前にスウェーデンに戻って来て、スウェーデン国内では屈指の指導者であるとの事です）が指導をしていました。昨年のシーズンは12チーム中8位と、あまり成績は良くなかったのですが、今シーズンから3名の選手を新たに補強し、今シーズンはさらに上位に上がりたいと言っておりました。

＊　＊　＊

このクラブのはハンドボールだけのクラブという事で、男女のチームを30チーム持ち、男女の一軍は一部リーグに所属しています。一軍の選手は全員ハンドボールを通し、個人差はあるものの、いくらかの報酬を得ています。また、ジュニアチームの指導も、選手たちによって行われていました。私はこの事を見て、とても良いことの様に思いました。選手が教える立場になるということは、ハンドボールに関して理論的にしっかりしたものを持たなければいけなく、その場合、今度は自分が選手でプレーしている時に監督から指示をよく把握しなければいけない訳ですから、選手にとってはプレーの意味を噛み締めながら日々のトレーニングを行わなければいけないのです。

ですから、トレーニングが終った後も、監督のもとに、選手が1人、2人という具合に集まってきて、プレーの確認、OF、DFシステムの確認が常に行われていました。

トレーニングはと言いますと、1時間半のトレーニングを時間で基礎体力、技術、OF、DF、速攻、GKという様に分けられていました。基礎体力のなかではジャンプ力、シュートスピードに重点が置かれ、ジャンプ力のトレーニングにはハードル、跳び箱を用いた足の筋力の強化、またジャンプ力には腹筋、背筋も大変重要であるとのことから、その点が重点的に行われていました。

シュートスピードに関しては、メディシングボールを使用し、行われました（ウェイトトレーニングも週に2～3回行われています）。シーズン前とシーズン中では負荷を変えるなど、コンディションには注意がされていました。

OFのトレーニングは、2人、3人のコンビプレーに重点を置き、行われていました。しかし、シーズン中だという事もあって、コンビが合うまで行うというのではなく、次から次へと場面を変え、短い時間の中でいくつもの場面を想定してプレーさせていました。

DFのトレーニングでは、6人でのDFが中心で、6－0のシステムが取り入れられ、個々のDFのポジションチェンジはなし、2枚目のDFは7～7.5m迄しか前へ詰めてはいけないというルールがありました。

速攻ではGKの球出しの早さとスローのボールの速さが要求されていました。

GKのキーピングのトレーニングでは、サイドシュートでボールへのかぶせ方、近目を空けておいて近目をキープするトレーニング、ループシュートをはたき落すトレーニング、また下を空けておいてキープするトレーニング、真ん中でのトレーニングに対しても、流れて来たシューターに対し、流れた方だけを取りにいく、また逆を取りにいくという具合に、OFのトレーニングの時の様に、いくつもの場面を想定してトレーニングがされていました。

＊　＊　＊

1時間半程の時間の中に、次から次へと種目が目まぐるしく変わるため、見学してノートをとっている私もウカウカしておられないというくらいでした。トレーニングについては、簡単ではありますが、以上の様に行われました。

10日程の滞在の中で、3試合ゲームを見る事が出来ました。4チームを見たのですが、どのチームもDFは6－0で、IRSTAと同じシステムをとっていました。OFはコンビプレーの中で、個人技を発揮する様に、どのチームも攻撃のきっかけがブロックなり、スルーなり、そこのポイントから始まっていました（きっかけは各チームによって多少変化はするものの）。

最後になりましたがHellgrenがGKの出身と、いうこともあって、日本の若い選手（GK）で、上手になりたいという選手がいたら、いつでも指導するので、是非スウェーデンに送りなさいとも言ってくれました。「私が…」という人がいたら、行ってみてはいかがでしようか。

10日間という短い期間でしたが、また違う見聞が出来た事を喜び、スウェーデンから帰って来ました。

26年ぶりに！ハンブルグチームが大阪訪問

大阪市ハンドボール連盟理事長　山中善之祐

大阪市の少年サッカーチームが92年8月1日～12日にハンブルグを訪問して友好都市ハンブルグサッカーチームとの交流試合を行った。それを見たハンブルグ・スポーツ部門代表アドルフ・ボレムスキー氏より92年9月10日、大阪市教育委員会スポーツ課にハンドボール部門も交流を希望する連絡が入り、92年10月20日に大阪市・大阪市ハンドボール連盟として受入内定の返事を送付し、以後連絡を取り合い、日程的には当方としては国体前で十分な応対が困難であることを諒解のうえ実施することに決めました。

来阪メンバーは19名で、ハンブルグの5つのクラブから選抜された、REGIONALより12名、OVERより3名で編成され、平均身長は184cm以上の選手構成で、試合の結果は6戦全勝で終了しました。

対戦を終えて感じたことは、韓国チームと違い、大柄でパワーとスピードがあり、特に縦の1歩のスピード・パワーで割られた得点が目立ちました。シュートは角度のあるスナップのきいたスピードの速いシュートで、日本のGKの止める感覚では得点になりやすく、ハンブルグのGKのはじき止める技術を見習う必要性を見いだしました。

特に大阪で対戦した一般クラブチームにも全力でゲームをし、好感を感じました。

さて、ハンブルグを招待して感じたことは、この様な高いレベルのチームが来阪・来日しているのに大阪だけで終わらすのか（今回は広島の好意で1試合実施）、ハンドボール競技の技術向上、ハンドボール競技のアピールに疑問を感じました。地方の市と連盟が招待し運営するのでは、駄目なのか？

広島では、アジア大会があるためか、ただの一試合（休館日で条例で観客無しの試合）であるのに、テレビ・新聞が取材し大々的に報道してくれたのに、大阪では国際試合をしているのにマスコミは無視、ハンドボール競技のアピール度の低さを感じた。当方のピィアール、連絡不十分もあるが、観客動員にも疑問を感じた。

運営面で感じたことは、経済的不安で対戦を見送った面がみられたが、今回の運営では市よりの補助金はあるとしても、大半以上は参加したクラブチームの選手の挙出金での運営で、あらゆることに無駄を省き、自前の運営を考え実施しました。多少の不足不満は生じますが、やれば一地方連盟でも行える感触をつかみました。要は、派手さを失くし、日本人特有の見栄張りをやめればいいと思います。実際に彼らも大いに感謝感激して帰国しました。

大阪市・大阪市ハンドボール連盟ではこの交流を基にして、来年は（4月26日～5月6日）ハンブルグに大阪市のクラブチームが訪問することに決定しており、以後隔年に来阪・訪ハンブングと同時に、同じ友好都市の上海市との三都市の交流親善試合も計画されています（本年度少年サッカーが大阪市で実施しました）。

最後にこの大会にご協力願った広島県ハンドボール協会・湧永製薬・日新製鋼の皆さん、西元・大木氏、通訳を願った石倉さん、同時に大阪協会光島氏に誌上をかりて感謝いたします。

大阪市ハンドボール連盟は、大阪市の方針で今後多くの国際大会（東アジア大会・オリンピック等開催の為）、全国大会を実施する機会が多くなりますので、皆々さまのご協力をお願い致します。

対戦成績

日付	会場	チーム	得点	前半・後半	得点	対戦相手
■10月16日(土)	大阪市中央体育館	HAMBURGER	41	20—9 / 21—5	14	金曜クラブ
■17日(日)	大阪市立桜ノ宮高校体育館	HAMBURGER	35	17—11 / 18—11	22	大阪国体選抜
■19日(火)	広島市東区スポーツセンター	HAMBURGER	29	13—7 / 16—10	17	広島選抜（湧永・日新ヤング）
■22日(金)	大阪市立長居球技場練習室	HAMBURGER	40	21—6 / 19—9	15	桃陰クラブ
■23日(土)	大阪市立千島体育館	HAMBURGER	41	20—7 / 21—10	17	大阪社会人選抜
■24日(日)	八幡市体育館	HAMBURGER	36	15—13 / 21—11	24	大阪経済大学

県協会だより

静岡県ハンドボール協会

戦前に静岡県体育協会が発刊した「運動年鑑」によると「送球に関しては普及発達に力を到し昭和13年3月之が講習会を開く（講師安田弘嗣）同年12月28日日本体操学校（現日本体育大学）送球チームを聘し於静岡師範学校校庭講習並びに模範試合を施行す。参加者65名終日熱心に受講せり」このようにして本県に初めて紹介されましたが、これは日本送球協会が、昭和13年2月2日に日本陸連より独立し、正式に発足した期日に近く、わが国では東京以外の地方としては、大阪、兵庫、岡山、茨城とともに最も早く普及した部類に属するものであります。

このように本県ハンドボールの歴史は古く、昭和15年の第1回明治神宮大会に男子は静岡師範（現静岡大）、女子は静岡高女（現静岡城北高）が県予選を経て出場している。静岡、清水、富士、沼津地区を中心に育ってきたハンドボールは、指導者の数も増え、現在は全県下に普及されてきました。東海を制するものは全国を制するという言葉を合言葉に、戦後、愛知県とともに全国のハンドボールを永い間リードして来ました。中でも、男子片瀬喜代次氏が率いる清水市立商高と女子望月正氏が率いる静岡城北高校の数々の全国制覇はすばらしい実績をもたらせてくれました。



そういうなかから、静岡城北高出身の黒川泰恵、川崎幸子、鈴木功子がルーマニア、西ドイツで開催された女子世界選手権大会に出場。モントリオールには佐藤要二（清水商出）、柴田正章（浜松南出）、ロスアンゼルスに大畑孝広（静岡農出）の3選手をオリンピックに送っています。

現在の本県ハンドボールは高校50チームを中心に、一般20、大学5、中学5チームで活動しておりますが、中学校の普及の遅れと指導者不足で競技力向上が思うようにいかず、他県から取り残されつつあることは誠に残念なことです。

「感動は〝いっしょうけんめい〟の熱い風」のスローガンのもとに開催された平成3年度の地元静岡での全国高校総体で、静岡城北が久々にベスト8に入り、国体にも少年男女が出場するなど地力は充分に持っています。中学・高校・大学・一般と、それぞれの分野でも力をたくわえております。優秀な若手指導者が、中学・高校に増えてきました。

もともと本県指導者は旺盛な研究心と熱心な指導でチームを育て、つくり上げてきたのですから、第二、第三の片瀬、望月両氏の後継者が出て、ふたたび全国に君臨する日がくることを願い、地道に焦らず、指導者の育成に力を注ぎたいと思っております。

平成15年、46年振りに静岡国体の開催が事実上決定しました。10年後の開催だけに協会役員も若手に一新し、底辺の拡大、選手の発掘、育成強化策など本腰で取り組み、競技力の向上を図る必要があると思っています。

福井県ハンドボール協会

本県のハンドボール協会は、昭和35年、当時の福井商高の西島喜代治、高志高の東哲郎、北陸電力の広谷俊夫の三氏を中心にして設立・発足しました。

生みの親の苦労を知り、協会の基礎作りに貢献したのが昭和43年開催での福井国体の教員チームの面々であった。この教員を二代目と表現すれば現在中・高の指導者として活躍しているのが三代目になります。



福井県協会にとってもここ2～3年で急激な上昇カーブをみせております。それは昨年度、全国中学大会での大東中学女子の全国優勝、男子光陽中の3位、北陸電力の日本リーグ二部入りと、本県協会として歴史に残る年でありました。

本年度においても夏のインターハイにおいては福井商業高校がベスト8に入いるという様に上昇カーブの一途をたどっております。高校男子も全国上位に挑戦しているところであり、近々高校男女のベスト4、全国制覇も実現しそうな意気込みを感じる訳であります。

協会としても本年度より定例の常務理事会を毎月1回開催し、意志の疎通を図っている。又リーグ部を新たに設け、日本リーグ福井開催の選手・観衆に喜んでもらえる企画をどんどん演出している。この様に福井県協会はハンド熱がどんどん高まっている現状です。

日本協会は1997年世界選手権熊本開催誘致を決定しました。私共も大会が実施されることをお祈りし、協会報告とします。

連載2

ハンドボールの指導法

指導委員会委員長　大西　武三

第2回目であるが、今回も具体的な内容に触れることが出来なかったことを先ずお詫びしたい。

'93WC・ロシアチームの優勝に思う

1992バルセロナオリンピックでは男子は旧ソ連を中心としたチームが優勝したが、今年3月にスウェーデンで開催された世界選手権大会では旧ソ連の流れを汲むロシアが優勝した。

そのロシアについて「ワールドハンドボール」に次のような記事が出ていた。見出しが「ロシアのチームはタイトルを取るのに2週間の準備で十分であった」であり、「選手一人一人が何をしたら良いのかを十分に知っていた。普通のチームならとても2週間では出来ないことをピカ一のロシアチームは成し遂げた。世界選手権大会を制するのにそれ以上は必要なかったというのは本当のことである。監督のウラディミール・マキシモフ（旧ソ連の有名なアタッカーであった）は、彼らがジュニアチームの時の監督であり、同じスタイルで数年間やってきたのも一因である。彼らは素晴らしい選手であり、スウェーデンでの第13回ジュニア世界選手権大会で優勝している」としている。

バスケットのドリームチーム

これとよく似た話はバルセロナオリンピックで優勝したドリームチームである。ご存知のようにプロリーグの際だったプレイヤー達が、マジック・ジョンソンの呼びかけで集まったと言う（これでヨーロッパはバスケットが人気がでてハンドボールを脅かし始めていると言うことである）。

このチームは、恐らく一緒に練習した時間は極少ないであろう。ひょっとしたらないかも知れない。どんなゲームをやるか打ち合わせ程度かも知れない。それで十分なスペシャリストが集まっているわけである。サッカーが大変なブームであるが、Jリーグも強い代表チームを作る一環として発足したと言われる。高いレベルで揉まれ成長すれば、強化強化と騒がなくても済むという発想である。

スポーツイベントがこれだけ過密する中では、代表チームが何百日も強化に時間をかけることは無理な時代であり、今となっては新しい発想が求められるわけである。ナショナルチームとは選り抜きのエリートプレイヤーが調整して試合に臨むのが理想である。

「自立した選手」の育成

ロシアやアメリカのバスケットのチームで思うことは、指導体制の一貫化の問題と選手の育て方に関して、如何に自立した選手を育てるかという問題である。

たった2週間の準備で世界を制することが出来たのは、ジュニア時代に一緒にやっていたこともあろうが、選手一人一人がハンドボールを良く知り、それを実現出来る技術を身につけていたことである。

ハンドボールはチームゲームであり、そのチームが求めているゲーム構想を理解し、それを実践できる各個人の技量が必要である。よく経験することであるが、ハンドボールをよく知り技術のあるプレイヤーが集まれば、一度も練習をしたことがないチームでもゲームを上手に作っていくことができる。逆にチームから離れると、力を発揮できないプレイヤーがいる。このプレイヤーは、そのチームでしか生きられず、いわば自立出来ていない未熟なプレイヤーと言える。選手はそのチームの単なる駒であってはならず、ゆくゆくは一人一人がチームのゲーム構想を理解し、独力で判断し、プレイして行ける自立したプレイヤーにならなければならない。

指導体制の一貫化

指導体制の一貫化とは、言い換えれば「自立したプレイヤー」を如何に育成するかの問題と言える。

今始まった事ではないが、ハンドボール界では指導体制の一貫化が叫ばれて久しい。何故か。アジアで少なくとも男子はソウルまで、女子はモントリオールまでトップを誇り、世界で上位にいけなくともアジアでの日本の面目を保ってきた。しかし、韓国や中国或いはアラブ諸国の台頭で日本の弱体化が目につくようになってからは、やはり何とか強いナショナルチームとの声は大きくなってきている。そこで出て来るのが指導体制の一貫化の問題である。

ナショナルチームに入ってもとっくに卒業しているはずの技術を教えねばならないとすれば、本来ナショナルチームとしてやらねばならないことが出来ない訳である。大学で何を教えているのだと言うことになり、大学では高校は、高校の指導者は中学校では、となる。

一人の選手は何人もの指導者に育てられる

日本は指導体制の一貫化が非常に図りにくい体制にある。一人の選手は一人前になるまでに何人もの指導者によって育てられ、その連携も取れないままである。技術体系も指導体系もまだ十分成熟していない。

熱心な指導者なら、そのレベルで出来るだけ勝ちたいと思う。その選手の将来にわたる計画の基に指導することは、今の社会の情勢ではちょっと考えにくい。

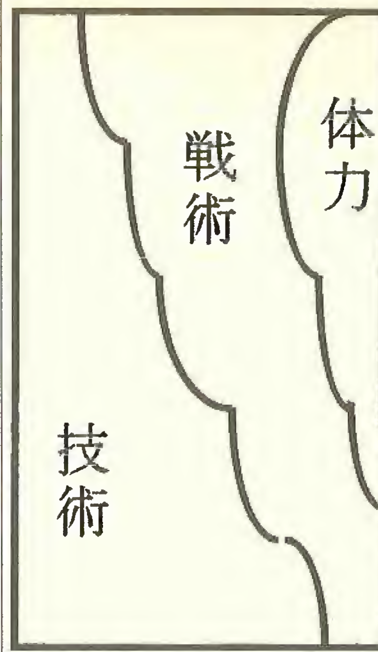
一般的には図のように低年令層

ほど技術面に比重を置き、段々と戦術、体力的な面を強化していくと言うのが順当であろう。実際、小学生や中学生に高度な戦術を教えれるはずがない。その戦術をこなそうにも技術がついて行かない。従ってチームの戦術としては小学生、中学生にとって無理のない簡単なものを採用しなければならない。

それよりパスキャッチ、ドリブル、シュート、ステップワーク、身のこなしなど、基本となる技術をしっかりと身につけさせ、それらの技術を使ってゲームを楽しませるようにする必要がある。

勿論勝負も大事であるが、戦術に拘って高望みをし、自由奔放な子供の自由を奪ってはならない。基礎技術の習得に当たって、特に注意しなければならないことは、動作は回数を重ねると習慣化する。悪い動作が習慣化しないように、特に初歩段階は注意して観察し指導することが必要である。私は大学でいろんな選手を預かるが、習慣化した悪癖は到底直しづらいものである。

そう言った意味で、プレイヤーが技術を獲得し習慣化していく過程に接する指導者の役割と責任は、大きいものがある。



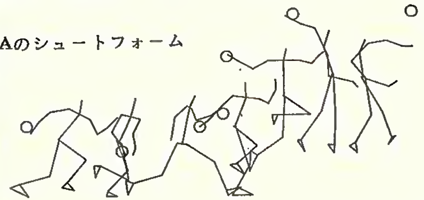
ジャンプシュートの動作について

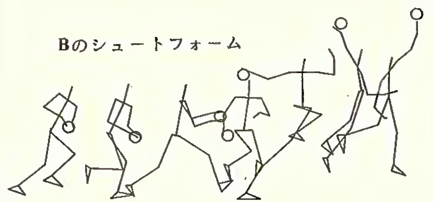
例えば、大学で預かった選手にジャンプシュートをさせてみると、実に様々のフォームでシュートを試みる。ジャンプシュートを成功させる要因はいろいろあるが、その一つにジャンプの滞空対空時間、ジャンプの高さや幅がある。GKやディフェンスのタイミングや方向を外す上で、それは重要なファクターである。

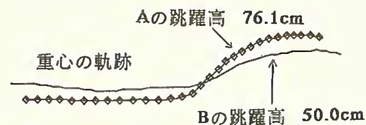
ジャンプシュートは走・跳・投が連続融合するハンドボールの技術の中でも最も重要な動作であるが、ボールを持っての動作であるために技術的要因が大きい。

右の図は高く跳んでジャンプシュートをさせたときの、A及びBのシュートフォームと重心の軌跡である。私のクラブの部員の中で最大と最小を比較したものである。良く跳ぶものとそうでないものとの差は25cm近くもある。この差はどこから出てくるであろう。体力・技術的要因などを分析してみなければならないが、ここで言いたいのは、これだけ違って育てられて（育って）きたと言うことである。

もしこの選手がもっと跳べたらと思うことはよくある。指導者の責任だけに帰することが出来ないが、正しい動作を学び或いは教えられなかった結果として今あるわけである。次回は跳ぶ人とそうでない人の動作の違いについても書きたいと思っています。







連載2

ハンドボール競技選手のコンディショニング

《ハンドボール選手の体力づくり例から》

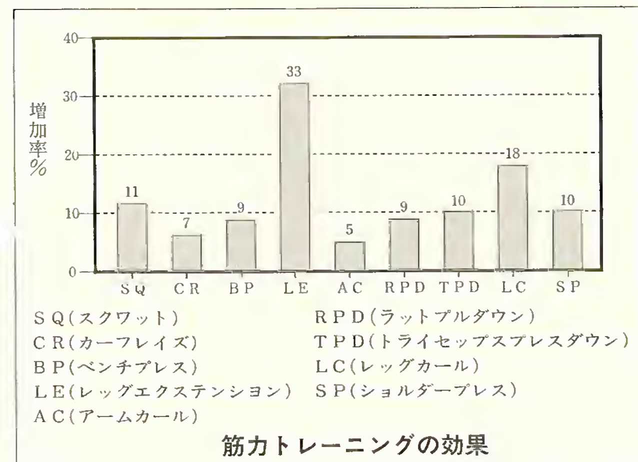
スポーツ医科学委員長　西山　逸成

現在の男女ナショナルチームのスタッフや選手達が世界選手権大会、国際大会、アジア選手権大会等に参加した所見のなかに、現状の体力水準では、ヨーロッパの選手の〝高さ〟と〝パワー〟そして〝闘うガッツ〟や韓国選手の〝スピード〟と試合中を通じて終始劣ろえない〝高い強度の持久性〟に対抗して勝利を追及することの困難性を指摘している。そしてその声は、1991年広島市で実施されたバルセロナオリンピック大会アジア地区予選会で無念の涙を呑んで以来2年後の今日まで、まるで解決される方向にさえ進んでいないと言えよう。

即ち、各種大会の都度、『技術では敗れなかったが、高さ・パワー・スピード・スタミナともに今一歩及ばなかった！　今度は心・技・体のオールラウンドプレイヤーの養成を目標として「心」では勝利への執念・集中力と、「技」ではスピードある基本技術、「体」では30％アップの基礎体力の向上』をそれぞれテーマづくりの要求水準（単なる目標水準とは異なり最少限の到達水準の意味）とした筈であった。とくに体力づくりの努力目標としては、現在の男女ナショナルチーム共通の課題としてのスピードハンドボールが世界水準で戦えるためには、前・後半の各30分間（1万mを2本）を連続するという有酸素運動のみならず、30～60回の激しい攻防戦のなかで、ダッシュ、フェイント、ジャンプ、シュート等の無酸素的動きを繰り返し継続できなければならないことになろう。そのための体力的条件としては、筋力・無酸素パワー・有酸素パワーの向上を基礎としたオールラウンドなトレーニングが必要となろう。

本稿では、筋力づくりの目標として、スポーツ医科学委員会が、バルセロナオリンピック大会アジア地区予選会終了後に強化と選考の二面から提唱している背筋力指数（背筋力／体重）は〝体重の3倍（女子は2・5倍）を目標水準とすべきである〟という点から現状分析を試みてみよう。背筋力の重視の意義は、体幹筋の指標として、自己の体重をコントロールする走・投・跳の各種運動とその動作の高水準で劣ろえない持続、さらには腰椎障害の予防上の見地からも疑いなく人体の強固さと呼ばれてきている所以だからである。また体幹筋の深さは造血機能にも影響するとさえ唱えられていることから、人間の健康度の指標とも考えられよう。

昭和49年水準の男子ナショナル選手のなかで背筋力指数3・0水準の選手は、モスクワオリンピック代表（1980）の4名（山本・津川・福井・大原）、そしてバルセロナオリンピック・アジア地区予選代表（1990）の2名（中山・長沢）のみである。一方、女子ナショナル選手で同指数2・5水準の選手をみると、バルセロナオリンピックアジア地区予選代表（1990）の8名（小野寺・松田・谷本・市来・尾苗・西村・松沢・丸田）であった。とくに女子ナショナルチームとして背筋力のみならず、総合体力として歴代で最高の水準を示した1990年度チームはオリンピックアジア予選を日本国内で実施するという好条件を機に、大会前150日間の長期間合宿を実施した結果といえよう。



筋力トレーニングの効果

その実践例（平成3年度日本体育協会スポーツ医科学研究報告＝森田委員担当）を紹介し、読者諸兄姉のトレーニングに資したい。

4月から8月までの150日間の長期合宿期間中に女子ナショナルチームに対し、体力測定結果を考慮し、筋力、全身持久力およびオールラウンドな基礎体力の充実向上をはかった。**筋力トレーニング**は能力を考慮し、図にみる項目で週2回実施し、それぞれの向上効果が得られた。勿論トレーニングの負荷強度は10RM（10回が無理なく繰り返すことのできる重さで実施する運動で50～70％の負荷強度）×2セットで実施した。**全身持久力**の基礎トレーニングは、①70～90％速度での40～10分間持久走（12分間走記録参考）、②80～90％インターバル走・全力走のレペティショントレーニング（150m・300m走記録参考）、運動機能の効果としてその変化範囲は、体重でマイナス5・9～プラス1・3kg、背筋力で0～プラス31kg、100m走でマイナス0・8～プラス0・3秒、12分間走で3～411mであった。

願わくは、地道な体力づくりを続けて、日本チームなりの得意な技術・戦法と、そして決定的に優位な体力水準でアトランタ・オリンピック・アジア地区代表権獲得にチャレンジしてほしいものである。

競技専門委員会

委員長　北井　晴次

21世紀に向けたハンドボール競技の振興に関する一考察

ハンドボール屋外専用競技施設完成予想図案(例)



指導委員会の専門委員会である競技専門委員会より、国体を契機とした屋外ハンドボール専用競技場の確保に関する意見が昨年度より提案され日本協会で話し合われております。ここにその案を提示します。ご意見があれば文書にて日本協力にお寄せ頂きたくお願いします。

はじめに

ハンドボールは、1922（大正11）年、我が国に紹介されて以来、学校体育を中心とする普及・発展に加え、関係者の永い間の努力により、近年、企業スポーツや市民スポーツとしても広く活動されるに至ってまいりました。

御案内のとおり、世界的には、1972年ミュンヘンオリンピック以来、オリンピック競技として定着（戦前のベルリン大会で実施）し、グローバルなスポーツとして世界各国で愛好されるに至っており、今後、21世紀に向けて、ハンドボールのより一層の普及・振興を図ることは我々の熱望するところであります。

そのため、オリンピック等における日本の顕著な活躍や日本リーグ等トップレベルの充実について、さらに強力な推進を図ると同時に、とりわけ、小・中・高校生を中心とする青少年層に着実に愛好の輪を広げることが、将来的にも重要な基盤となることは明白であります。

近年、社会環境の急激な変化は国民のスポーツに対するニーズを一段と多様化・高度化させており、例えば、新たに2002年ワールドカップサッカー大会の日本招致活動やJリーグの開幕など、大きな関心を集めております。

我がハンドボールにおいても、熊本における世界選手権大会の招致が決定されたと伺っており、たいへん喜ばしく受け止めております。

このような状況のなかで、先のサッカーにおいては2002年ワールドカップ大会の日本招致活動に関して、15自治体が2億何千万円もの供託金と併せて何万人か規模の専用スタヂアムをそれぞれ用意することという条件を受け入れて立候補をしたことは、御存知のことと思います。また、Jリーグに関しても各地でスタジアムが整備されつつある状況であります。

そして、我がハンドボールを振り返ってみると、そのような専用のハンドボール場というものは何もなくたいへん残念な気持ちがする訳であります。

ハンドボールの競技会は現在のところ屋内と屋外が併用されております。ある大会は総ての試合が屋内でという場合もありますし、その反対に総ての試合が屋外でという場合もあります。また大会のはじめの部分は屋外で行い、途中から屋内でという場合もあります。

埼玉県におきましては、特に青少年層の大会については、後者の場合で実施されることが多い現状であります。しかしながら、屋外の競技会は天候に左右されることはやむを得ないとしても、通常、学校の校庭などを借りるので観客が見る場所も満足になく、また、ラインクロスがハンドボールの死活でもあるのに試合が進行するにつれてラインが不明瞭になってしまう、さらに凹凸ができたり土ぼこり等にも悩まされるなど、選手・役員はもちろん応援に来てくれる多くの人にとって、果たしてよりよいイメージアップとなっているだろうか、というジレンマを絶えず感じながら、何かよい解決方

法はないものかと話し合っているのが現状であります。

ならば、いっそう総てのハンドボール競技会を屋内で実施したらどうか、そのためにはハンドボールは屋内競技であると決定したらどうかという意見があります。しかしながら、仮にそのように決定したとしても総ての競技会を屋内で実施するためには、体育館の規模や設置状況をはじめ、他の屋内競技との競合問題や運営面等において、現実には常に多くの課題を伴うことは明白であります。また、一度にたくさんの試合が展開され、多くの人が一堂に集う屋外の競技会は、屋内の競技会とは違った盛り上がりがあり、ハンドボールのよい点でもあると思います。

ですから、今後、青少年層はもとより、多くの世代の人々を対象として、より一層ハンドボールの普及・振興を図るためには、これまでと同様に、屋外での競技会と屋内での競技会を有機的に併用して展開していくことが効果的であると考えます。

このようなことから、屋外におけるハンドボール競技会について、何かこれまでと違ったイメージを作り出すことができないだろうか、そうすることがさらに発展につながるのではないかという考えから、日ごろ埼玉県の関係者で理解を深めている内容についてお知らせします。

1 スポーツ振興の基礎

一般的に、ハンドボールをはじめ、スポーツの振興を図るためには、次の要素が円滑に推進されることが必要であるとされています。

1 施設の確保
2 指導者の養成・確保
3 適切な振興プログラムの実施

我が国のハンドボールの振興については、これまで多くの熱心な指導者が養成され、彼らの献身的努力によって様々なプログラムが展開されながら、今日のような活況に至っておりますが、振興策の最も基本である「施設の確保」、とりわけ、屋外での競技会場については総合的な検討がなされることはありませんでした。

特に屋外専用競技場という施設の整備については、何ら対策を講じる機会が得られないまま、現在に至っており、今後、21世紀に向けての著しい社会環境の変化に伴い、他のスポーツがダイナミックな施策を推進するなかで、ハンドボールにおいてもこの問題を考えなければならないと思います。

2 専用競技場施設整備の手掛かり

それでは、仮にそのとおりだということになって、屋外の専用の競技施設を整備しようとしても、おいそれとできることではありません。やはり自治体に働き掛けて、自治体の施策として推進するのが最良だと考えます。

自治体がスポーツ施設の整備を推進する際大きな推進力となるのは、今回のワールドカップサッカーの場合のようなスポーツイベントとして、自治体が積極的にその施策としてとりあげてくれることが望まれます。ですから、今度の熊本の姿勢には大いに関心を寄せている訳です。

しかし、全国的に見ますとハンドボールが自治体の独自の施策として取り上げられ、競技場の整備まで積極的に手掛けられるというような機会は残念ながらほとんどありません。

それでは個々の要望しかないのだろうか、ということになりかねません。

これまで私なりに経験し、また推測することですが、自治体がスポーツ行政を推進するにあたり、最も強い理由付けとなり説得力を発揮できることは、例えば、国の方針で決定していることとか、全国組織の規約や規程にどう位置付けられ、定められているかということ、また他県の状況や前例はどうであるかといったことがあります。

このような自治体のスポーツ行政推進の取組み方がわかればわかるほど、やはり自治体に積極的に取組みをさせることが最も効果的であると思いますが、自治体の行政施策に取り上げてもらうためには個々の要望程度では容易に功を奏しません。やはり、全国組織・日本協会といったレベルから自治体を積極的に指導することが不可欠であると思います。

3 国民体育大会開催と自治体の取り組み

現在、我が国のハンドボール界において、自治体が最も積極的にハンドボールに関与してくれる機会は、やはり国民体育大会だと思います。また、国民体育大会を開催する自治体は、何を置いてもスポーツ施設の整備に積極的に取り組むという実態からも、この問題

を考えることはどうだろうかと思う訳であります。

4 国民体育大会開催基準要項・細則

さて、国民体育大会の開催はその開催基準要項なるものに規定されております。現在、2巡目開催が進行している国民体育大会の目的は「国民体育大会開催基準要項」において「広く、国民の間にスポーツを普及し、アマチュアリズムとスポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力の向上を図り、併せて地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与するとともに、国民生活を明るく豊かにしようとするもの」であり、さらに「大会の諸施設は、将来地域スポーツの普及振興に役立つよう考慮し、別に細則で定める国民体育大会施設基準要項による。」とされており、別に定められた「国民体育大会施設基準要項細則」におけるハンドボール競技に関する施設の基準は次のとおり規定されております。

競　技	基　　準	摘　　要
陸上競技	日本陸上競技連盟公認の1種競技場1	1周300ｍ～400ｍのサブトラック1、投てき練習場1
サッカー	規定の競技場7面（うち芝生の競技場2面以上）	2会場地に分れてもよい
テニス	規定のコート16面	2会場地に分れてもよい
ホッケー	規定の競技場2面（うち芝生の競技場1面）	2会場地に分れてもよい
バレーボール	規定の屋内コート8面	2会場地に分かれてもよい 体高館の天井の高さは10ｍ以上が望ましいが7ｍ以上あればよい
バスケットボール	規定の屋内コート10面	2会場地に分かれてもよい 体育館の天井の高さは10ｍ以上が望ましいが7ｍ以上あればよい
ラグビーフットボール	規定の競技場4面（うち芝生の競技場2面）	2会場地に分かれねもよい
ハンドボール	規定の屋外競技場4面 規定の屋内競技場2面	2会場地に分かれてもよい 体育館の天井の高さは10ｍ以上が望ましいが7ｍ以上あればよい

5 国民体育大会開催基準要項細則における基準（抜粋）

これらのことからお判りのとおり、陸上競技には、毎年素晴らしい陸上競技場が一つずつ作られます。

かつて、サッカー協会とラグビー協会はこの細則を芝生の競技場2面というように改正をしました。その結果、同じように毎年芝生の競技場が整備されることになりました。

ハンドボールはといいますと、細則には規定の屋外競技場と、いうように規定はされておりますが、その規定が20ｍ×40ｍというコートの意味のみと解釈されてきたため、実際の国民体育大会の競技会は学校の校庭に4面のコートを画き、防球ネットを張って行われ、終了後はもとの校庭に復元されるということの繰り返しで、屋外の専用施設の整備・確保ということには国民体育大会を貢献させることができませんでした。

テニスは規定のコート16面と規定されているだけですが、国民体育大会のテニスの会場に行きますと観客席があり、クラブハウスがあります。調べましたら、かつて、テニス協会は細則のテニスの規定のコートというのはこういうものですよと、施設全体の指導をした時代があったのだそうです。単にテニスコートの意味だけではなく、一度どこかで作られるとそれが前例になり、さらに改良が加えられて次第にいいものになっていった訳です。

このようなことを考えておりますと、この細則のハンドボールのところに、例えばサッカーの芝生というように何かハンドボール独自の指定ができるならば、実際の場面が大きく変わってくるのではないかと期待する訳です。

あるいは先程のテニスのように規定の競技場の意味を単にコートの大きさだけという意味ではなく、総合的な施設として打ち出して、これから国民体育大会を開催する自治体に対して、日本のハンドボールの方針として指導していったらどうでしょうか。

6 国民体育大会開催基準要項細則における ハンドボール競技に関する「規定の屋外競技場」施設はどうあるのが望ましいか

私は、これまでの我が国のハンドボールを考えた時、国民体育大会開催基準要項細則に規定されているハンドボールの「規定の屋外競技場」の意味をもっと総合的に考えて、国民体育大会を準備する自治体を指導すべき時代ではないかと思います。

例えば、床面については、土よりも何か別の科学的な材質のものでもよいのではないかと思います。そして必要に応じてゴールエリア等を色別に区分けすることができれば素晴らしいと思います。また、その周囲に観客席等を付設したり、会議室、更衣室、便所、用具室等を含めたクラブハウスのような管理棟を設置することができればハンドボール独自の競技場として広く印象づけができるのではないか。

7 このような専用競技場施設の必要性

(1) 我が国のハンドボール競技における屋外専用競技場施設の現状

現在、全国的に、公共の屋外ハンドボール専用競技場施設は皆無です。今後、より一層ハンドボールの積極的な振興を図るためには、サッカー場や野球場と同じようにハンドボールをイメージする公共の屋外専用競技場施設の確保は重要だと思います。

自治体を動かしてこのような屋外専用競技場施設整備を実現することができれば、国民体育大会終了後には、小・中・高校生等の青少年層はもとより、広く地域住民に対して、ハンドボールの振興を図る上で、各種競技会の開催やスポーツ教室の開設をはじめ、スポーツクラブやスポーツ少年団の創設などを通して、必ず有効に活用されると思います。

(2) ハンドボール競技技術の系統性の維持

御承知のとおり、ハンドボールは最もスピードに溢れる競技の一つであり、多彩なパスワークからの攻撃と、体をフルに使った防御との迅速な切り替えが、試合を支配する大きな要素であります。このため、常に研ぎすまされた鋭いフットワークや俊敏な身のこなしなどが要求されます。

我が国最大の競技スポーツの祭典である国民体育大会におけるハンドボール競技は、青少年から成年にわたる幅広い種別において、国内最高の競技技術水準を誇る競技者が覇を競うものと位置付けられておりますが、これまで、学校の運動場や多目的広場の地面の上で実施されてきた試合においては、いわゆる「土の性質（滑る、表面が凸凹になる、土ぼこりがたつ、ラインが消える等）」によって、ハンドボールの特性であるこれらの要素が十分に発揮されないという制約が必然的に伴っておりました。

このような制約を排除することによって、我が国最大の競技スポーツの祭典である国民体育大会において、最高の競技技術水準を誇る競技者達のもつ技能を最大限に発揮させると同時に、ハンドボールの醍醐味を余すところなく引き出した最高の試合を提供することが可能となり、このことから観衆にも大きな感銘と関心を与えるとともに、ハンドボールのより積極的な普及・振興を図るため、屋外ではこれまでと違った形のハンドボール専用競技場施設を整備することができればいいと思います。

(3) ハンドボールの競技技術の向上

ハンドボールは、「どのような場所でもできる」という認識のもとに普及・振興が図られてきましたが、近年における競技技術の進歩は飛躍的に高度なものとなり、これまでの学校の運動場や多目的広場の地面の上での試合においては、いわゆる「土の性質」によって、このような高度な競技技術の発揮が種々の制約を受けることから、競技技術の系統性を保持することが極めて困難となっております。

このため、我が国最大の競技スポーツの祭典である国民体育大会のハンドボール競技場が、国内最高水準の競技者達のもつハンドボールの競技技術をより高めることにつながらなくなっているのではないかと思います。

このような現状は、世界の競技水準への到達を目指す我が国のハンドボールにとって、まず第一に解決しなければならない最大の課題であり、今後、早急に屋内と屋外競技場の床面に関する条件的な差異を是正することが、国内最高水準の競技者達の競技技術をさらに高めることにつながるものと確信いたします。このため、屋外ではこれまでとは違った形の専用競技場施設を整備することができればいいと思います。

(4) 新しいハンドボールの創造

21世紀に向けて、ますますグローバルな発展を遂げる世界のハンドボールに向けて、日本のハンドボールが目を向けてほしいところは、我が国最大の競技スポーツの祭典である国民体育大会を単に都道府県対抗の場だけとせず、施設整備には最も効果的な契機と踏まえて、国内のハンドボールの競技技術の水準をさらに向上させると同時に、国民体育大会が開催される各自治体の地域住民に対して、ハンドボールの真の魅力を積極的に提供しながら、より一層ハンドボールの振興を図ることを基本として、早急に世界の競技水準に到達することではないでしょうか。

このため、ハンドボールをイメージするこれまでとは違った、また世界にも例のないような屋外でのハンドボール専用競技場施設の整備を推進し、我が国が世界に先駆けて、屋外におけるハンドボール競技について、「斬新なイメージ」を創造するとともに、我が国から21世紀の世界に向けて、「新しいハンドボール観」を発信することができたら素晴らしいと思います。

●機関誌委員会スタッフ
植村繁／恩田健一／木野実／本多正樹／菅野恵理／臼井鉄久／門松真一

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三三七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 平成五年三月二十六日 印刷 平成五年十二月一日 発行
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表 三四八一ー二三六一
振替 東京 六ー五八三四八番
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）

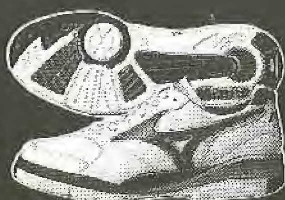
MIZUNO®
THE WORLD OF SPORTS



攻守を加速する
新戦力ラインアップ。



ウィングゾーンEX-L ¥14,000
16KH-20114 サイズ:23.5〜28.0
ホワイトにネイビー/ゴールド 他1色
●甲:人工皮革 ●底:ゴム、合成樹脂



ウィングゾーンEX-S ¥13,000
16KH-21162 サイズ:23.5〜28.0
ホワイトにレッド/シルバー 他1色
●甲:人工皮革 ●底:ゴム、合成樹脂





16OH-202 ¥4,700
検定球
亀甲型 天然皮革2号 HL-2



16OH-203 ¥4,800
検定球
亀甲型 天然皮革3号 HL-3



16OH-212 ¥4,400
準検定球
亀甲型 天然皮革2号 HL-2A



スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

●記載価格は税抜き価格です。消費税相当額はお客様にご負担いただくことになります。●ミズノ製品についてのお問い合わせ・ご相談は「ミズノお客様商品相談センターMUSIC」
東京 TEL.(03)3233-7110 大阪 TEL.(06)614-8110